

成田新線建設事業地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書

III

(堀之内遺跡)

昭和58年3月

日本鉄道建設公司  
千葉県文化財センター

成田新線建設事業地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書

III

(堀之内遺跡)

昭和58年3月

日本鉄道建設公団  
財团法人 千葉県文化財センター

## 序

千葉県は首都圏にあって、東京湾時代の一翼を担うとされ、21世紀に向けて、全国でも最も発展の可能性を秘めた地域といわれております。

成田新線は、新東京国際空港の開港に伴う交通網整備の一環として、空港と都心間のアクセス、及び北総地域の通勤通学輸送の確保を図るための鉄道として国から、提示されたものであります。

この成田市地域は、標高30から40mを測る台地が樹枝状に発達し、その台地上には古代からの遺跡が数多く残されております。

今回、成田新線の建設にあたり、工事区域内に遺跡の所在が明らかになりその取扱いについて関係機関と協議の結果記録保存のため発掘調査を当センターが実施することになりました。

約5か月に及ぶ発掘調査では、20数軒の平安時代の住居跡などが発見され、また、8世紀末、延暦15年に、鋳造が始められた、『隆平永宝』も出土し、貴重な資料を提供することができました。

これらの資料は、今後学術資料としてはもとより、教育資料あるいは郷土の歴史に関する理解を深める資料として広く活用されることを希望します。

最後に、終始、調査の円滑な遂行に協力された、日本鉄道建設公団、また、調査にたえず指導と助言をおしまなかった千葉県教育庁文化課・成田市教育委員会には厚く御礼申し上げるとともに、炎天下のもとに調査員に協力し、発掘調査に従事された地元のみなさまに感謝申上げます。

昭和58年2月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 今井 正

## 例　　言

1. 本書は、千葉県成田市堀之内における、成田新線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。堀之内遺跡のコード番号は211-017とした。
2. 調査は、発掘を昭和56年4月1日より同年8月31日まで、整理を同9月1日より昭和57年9月30日までとし、千葉県教育委員会の指示の下に、日本鉄道建設公団との委託契約に基づき、財團法人千葉県文化財センターが実施したものである。
3. 財團法人千葉県文化財センターでは、この事業を調査部長白石竹雄、同部長補佐天野努(昭和57年3月31日まで)岡川宏道(昭和57年4月1日から)班長斎木勝の組織の下に、発掘・整理作業とも調査研究員谷旬・山口直樹・鈴木文雄が当たった。
4. 作業の分担は、現場運営・図画作成等・原稿執筆を谷が、発掘記録・遺構カードの作成等を山口が、遺物管理・実測を鈴木が主として行った。
5. 本書で使用した地形図は以下のとおりである。

第1図 5万分の1図 (N I-54-19-10) 国土地理院発行 昭和53年6月

第2図 2,500分の1図 成田市都市計画図 No.35

6. 発掘調査の実施および報告書刊行までに下記の諸機関・諸氏の御指導・御協力を賜わりました。記して謝意を表します。

日本鉄道建設公団・千葉県教育庁文化課・成田市教育委員会・成田市川栗、吉倉、大清水、赤荻、関戸、芦田地区、八日市場市吉田、木積、多古町並木、光町篠本地区、および内勤の皆様。

大野政治・越川敏夫・野村幸希・平川南・山田常雄の諸先学。(順不同)

## 目 次

序	
例 言	
目 次	
1 節 立地と調査経過	1
1項 立 地	1
2項 調査 経 過	1
2 節 遺 構	4
1項 住 居 跡	4
2項 土 壤	20
3 節 遺 物	30
1項 住 居 跡	30
2項 そ の 他	38
4 節 ま と め	42

## 挿図目次

第1図 遺跡地形図	1	第15図 102、104号跡実測図	22
第2図 遺跡周辺図	2	第16図 108、109号跡実測図	23
第3図 遺構配置図	3	第17図 110、113、115、143号跡実測図	25
第4図 001、002号跡実測図	5	第18図 180号跡実測図(1)	27
第5図 003号跡実測図	6	第19図 180号跡実測図(2)	28
第6図 004号跡実測図	7	第20図 179、182、194、195号跡実測図	29
第7図 005、008号跡実測図	9	第21図 003号跡遺物実測図	31
第8図 009、010号跡実測図	11	第22図 004、005号跡遺物実測図	33
第9図 011、012号跡実測図	12	第23図 007、009、011号跡遺物実測図	35
第10図 014号跡実測図	13	第24図 012、014～016号跡遺物実測図	37
第11図 015、016、017号跡実測図	15	第25図 019、021～023号跡遺物実測図	39
第12図 019、020、021、022号跡実測図	17	第26図 024号跡遺物実測図	40
第13図 023、024号跡実測図	18	第27図 その他の出土遺物	41
第14図 101号跡実測図	21	第28図 墨書、刻書土器	41

## 図版目次

- 図版1 遺跡空撮（西より）、調査風景  
図版2 遺跡空撮  
図版3 遺跡検出状況（東側）、同（西側）  
図版4 001号跡全景、002～005号跡検出状況  
図版5 003号跡全景 遺物出土状況 カマド断面  
カマド断面  
図版6 004号跡全景 遺物出土状況 遺物出土状況  
カマド 同 断面  
図版7 005号跡全景、009号跡全景  
図版8 010号跡全景、011号跡全景  
図版9 012号跡全景、013号跡遺物出土状況  
図版10 014号跡全景、覆土断面、カマド、  
同 断面、同 断面  
図版11 015号跡全景、016・017号跡全景  
図版12 019号跡全景、020号跡全景  
図版13 021号跡全景、022号跡全景

- 図版14 023号跡全景、遺物出土状況、遺物出土状況  
図版15 024号跡全景、カマド、同 摒方、025号跡  
全景  
図版16 101号跡全景、102号跡全景、同 断面、  
103・104号跡全景、108号跡全景、109・110  
号跡全景、115号跡周辺  
図版17 143号跡周辺、143号跡全景、同 断面  
147～149号跡全景  
図版18 174号跡周辺、179号跡全景、180号跡全景、  
同 断面、182号跡全景、185号跡全景、  
194号跡全景  
図版19 201号跡全景、202号跡全景  
図版20 003～005号跡出土土器  
図版21 007・009・012・014・019・021号跡出土土  
器  
図版22 022～024・130・174号跡他出土土器  
図版23 遺跡出土墨書土器  
図版24 遺跡出土鉄製品・古銭

## 1 節 立地と調査経過

## 1項 立 地

本遺跡は成田市南西の取香川上流域の堀之内地区を載せる、長さ600m、幅500mの突出した樹枝状台地の付け根部分に位置する。この部分は東西から小支谷が入り込み、幅60m程に狭まっている。すなわち今回の調査対象地は独立丘に近い大台地の北縁に過ぎない。周辺の遺跡は余り知られていないが、詳しくは本書Ⅰで述べてあり、同書第1図の7が本遺跡にあたり、先行して行われた分布調査では No.34 と呼ばれたものである。

## 2項 調査の経過

本遺跡の調査が計画されたのは昭和15年早々であり、関連事業である関戸遺跡の発掘調査の終了を持って、同年4月2日より調査を開始した。

調査区は平均して幅25m、長さ120mの路線内に限られたため、グリッドの設定は路線中央線を基軸として  $10 \times 10$  m の大グリッドを設けることとし、その中を 1 m 方眼に区切る小グリッド化した。

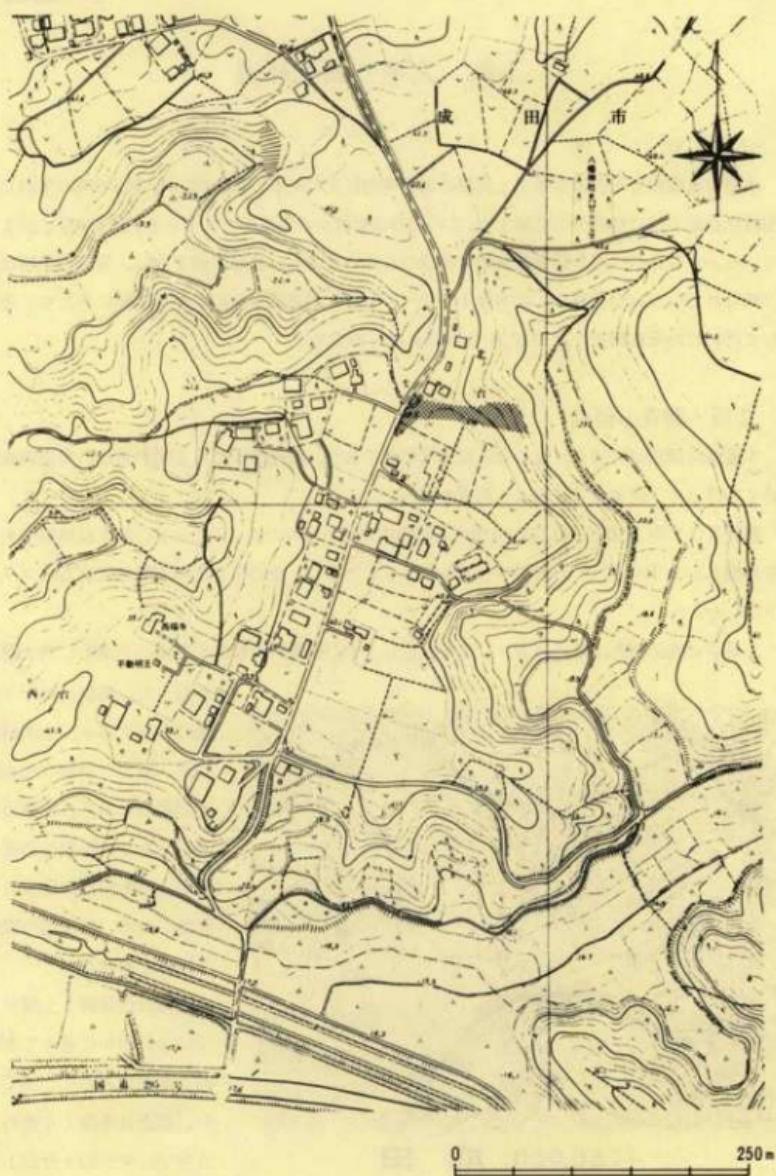
4月中に確認調査のためのトレーンチを設定し、その後遺構の検出のため、全面的に表土除去



第1図 遺跡地形図

を行った。遺構はかなり濃密に分布するが、上面の削平や、ゴボウ栽培のため擾乱が縦横にみられ、検出作業はかなりの時間を必要とした。また周辺が民家や可耕地のため、耕土地の確保も困難を極めた。

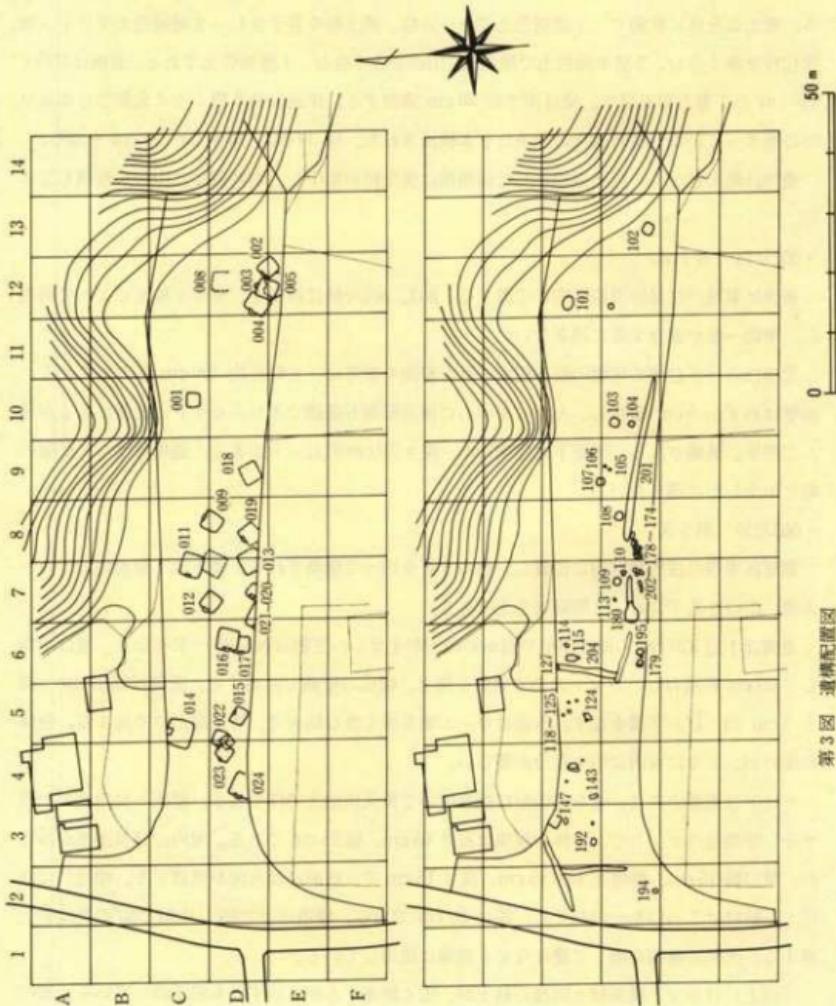
遺構は住居跡と土壙が主で、5月中旬に至って本格的な調査に入ることができた。調査は東端より進め、5月中に東側約4分の1の調査を終了する。6月中旬からは住居跡の精査とともに



第2図 遺跡周辺図

に土壤の発掘を本格的に始めたが、大型で、深いものが多く、断面観察用の土堤の崩壊なども危惧されたため、図面作成できなかったものも2・3ある。

7月28日には023号跡より「隆平永宝」が出土し、7月末日までは殆んどの住居跡の精査を行うことができた。8月には残る西端部分の土壤精査とともに、先土器確認調査のためのグリッド(2×4 m)を14ヶ所に設けたが、遺物は検出されなかった。8月23日までに空撮のための環境整備、遺跡清掃を終え、同月31日にはすべての作業を終了した。



第3圖 遺構配置圖

## 2節 遺構

## 1項 住居跡

## ・001号跡（第4図）

調査区東半中央付近のC10 Gr. 内に位置する。他との重複はないが、北側に向けて削平される。覆土は全体に軟弱で、1層褐色土でローム粒、焼土粒を若干含む、2層褐色土でローム塊、炭化粒を多く含む、3層黒褐色土で炭化粒、山砂を多く含む、4層褐色土である。遺構は225×205 cm の不整形形を呈す。壁は南で約30 cm 遺存する。床面は余り堅くなく北側ではゆるやかに高まっている。柱穴は床の中央に2本検出された。径30 cm、深さ20~30 cmを測る。

遺物は殆んどなく、自然遺物として南西部に炭化粒が集中し、南西隅には山砂が堆積していた。

## ・002号跡（第4図）

調査区東端の住居跡重複群内に位置する。003、005号跡に西壁を、東半を擾乱によって消失し、南側一部が遺存するに過ぎない。

遺構はカマド右側の床面の踏み固められた範囲を参考に、主軸長約300 cmと考えられる。南壁はわずか5 cm 遺存し、カマドを中心にして床の堅面も確認できた。カマドは北側にあるが殆んど削平、破壊される。南壁下に径30 cm、深さ30 cm のビットがある。遺物はカマド前面に数片出土したに過ぎない。

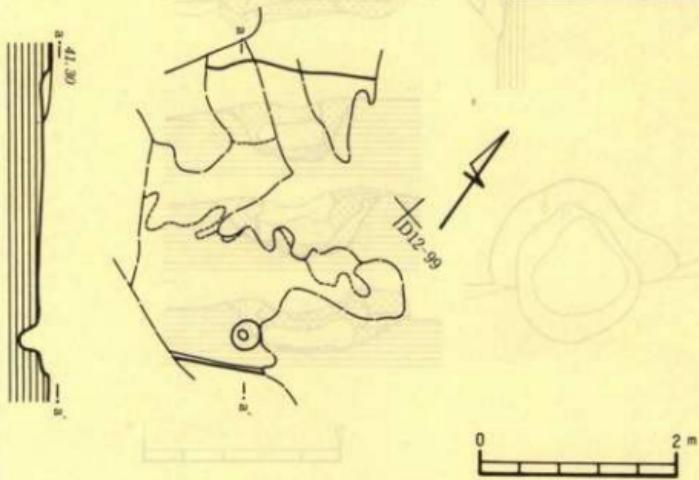
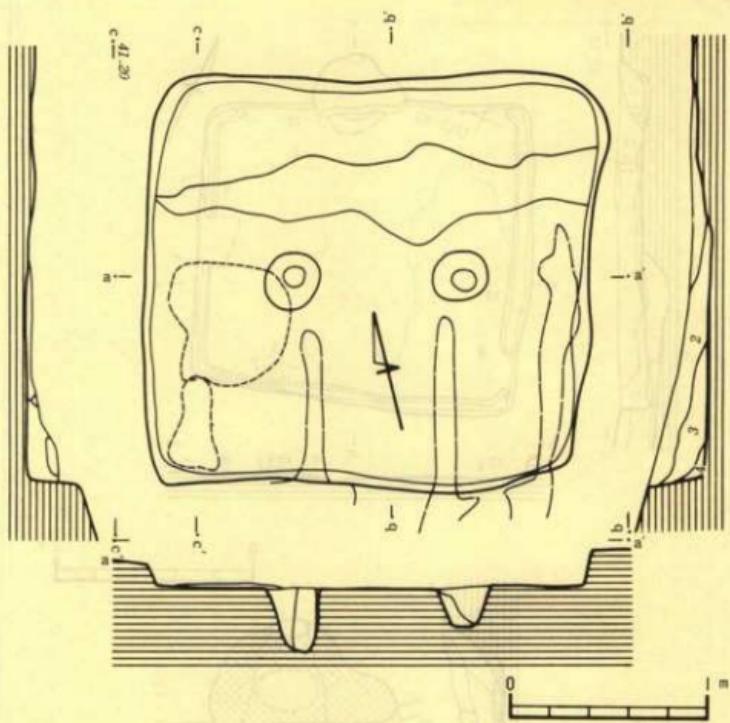
## ・003号跡（第5図）

調査区東端の住居跡群内に位置し、他の3軒を切って構築される。覆土は1層褐色土でローム塊、山砂を若干含む、2層暗褐色土である。

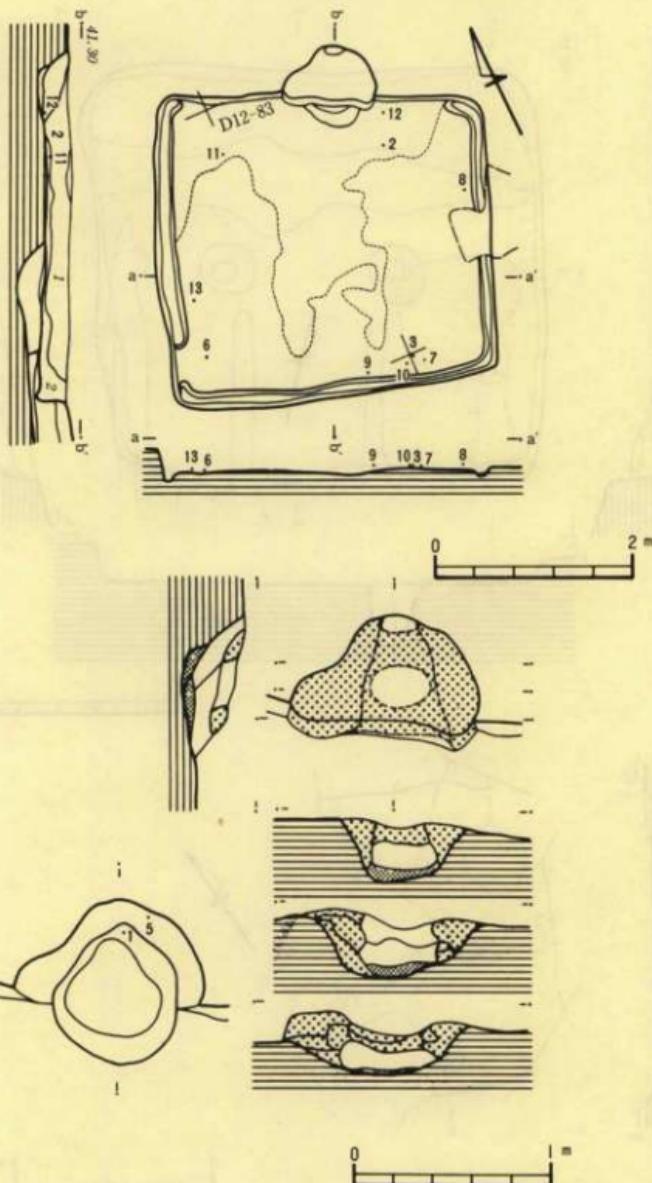
遺構は1辺320 cm の南壁がやや短かめの方形を呈し、主軸はN-65°-Eを示す。壁は平均して25 cm 程遺存し、カマドのある東壁を除き、幅広の壁溝が廻繞する。壁溝は幅15 cm、深さ5 cm の「U」字状をなす。床面はローム塊を多く含む貼床で、周辺部がやや高まる。全体に堅いが、とくに東西に中央部分が著しい。

カマドは東壁中央に、壁を半円形に掘り抜いて黄灰色粘土で作られる。壁面と焚口面が一致する。所謂屋外カマドで、本体の規模は長さ65 cm、幅95 cmである。室内には焚出部がみられ、焚口幅45 cm、燃焼部45×45 cm、高さ15 cmで、底面には火床が発達する。煙道口には粘土を貼付けて入口を一段高くし、幅は30 cmである。煙道は下で25°、中位で50°の角度で上昇する。天井の構架に際して甕片などを補強に使用している。

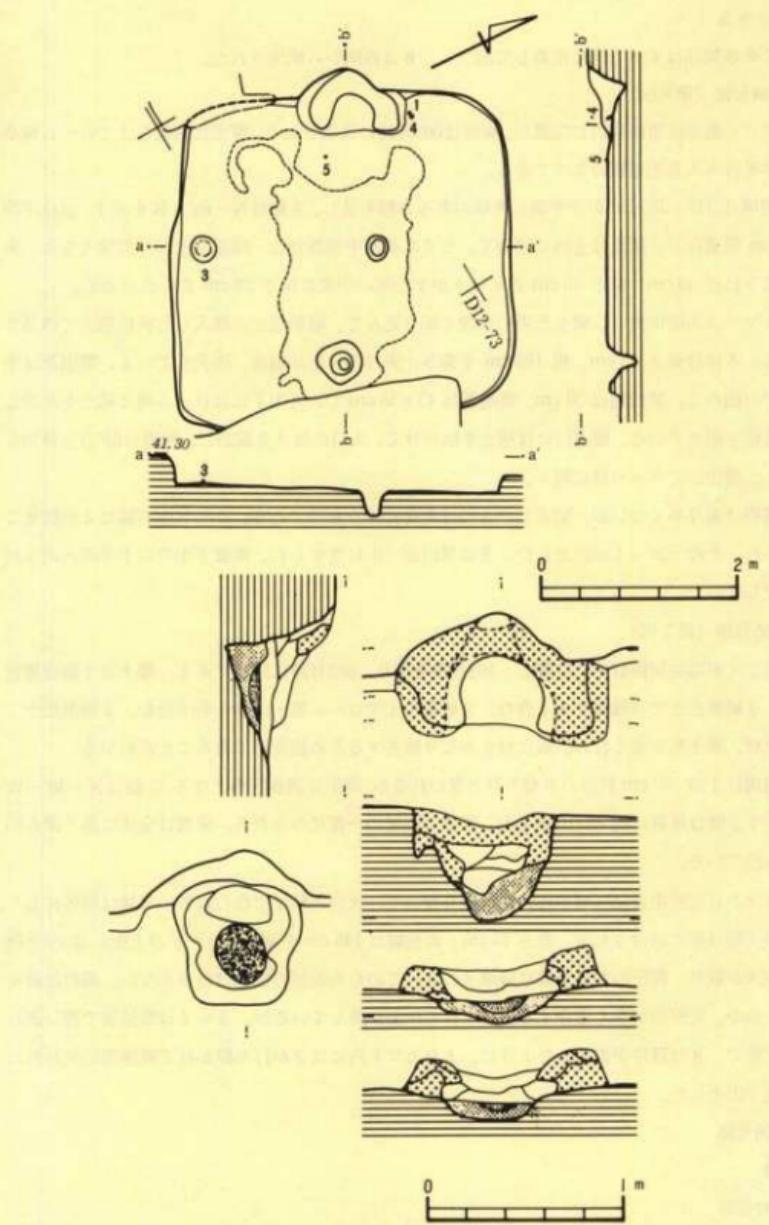
床面上にはカマド構築材と同種の粘土が、広く散布するが、いずれも若干浮いている。遺物



第4図 001・002号跡実測図



第5図 003号踏査測図



第6図 004号跡実測図

### 住居跡

のうち鉄製品はすべて床に密着して出土し、6は西隅から検出された。

#### ・004号跡（第6図）

同じく東端住居跡群内に位置し、東壁は003号跡に破壊される。覆土は暗褐色土でローム塊や山砂を含み人為的堆積のようである。

遺構は330×350cmのやや隅に丸味のある方形を呈し、主軸はN-60°-Wを示す。壁は平均25cm程遺存し、床面は全体に硬質で、とくに東西中央部分は一段盛り上がり気味となる。東壁直下に径40cm、深さ30cmのピットがまた床の中央に深さ20cmの小孔がある。

カマドは西壁中央に、壁を三角形に浅く切り込んで、暗褐色土の混入した灰色粘土で構築される。本体は長さ65cm、幅105cmを測り、天井の一部は崩落、流失している。焚出部は半円形の凹みで、焚口幅は50cm、燃焼部は45×55cmで、火床下にはローム塊と粘土を充填して基礎を固めている。煙道口には粘土を貼付けて、入口の高さを調節し、煙道は62°の上昇角を保ち、煙出口でラッパ状に開く。

遺物は余り多くないが、図示したものは本跡に伴うものである。カマドの右脇に4が伏せて置かれ、その下から1が出土した。5は焚出部の中に伏せられ、南壁下中央に下半のみの3が正立していた。

#### ・005号跡（第7図）

同じく東端住居跡群中に位置し、002号跡を切り、003号跡に床下にある。覆土は1層暗褐色土、2層黒色土で有機質を多く含む、3層褐色土でローム塊・山砂を若干含む、4層黒色土で炭化粒、焼土粒を多く含み、炭化材もかなり散在するため被災跡であることがわかる。

遺構は1辺300cm前後の不整方形と思われるが、南半は調査区外となる。主軸はN-40°-Wを示す。壁は垂直に約45cm掘られ、壁溝は西壁の一部にみられる。床面は全体に良く踏み固められている。

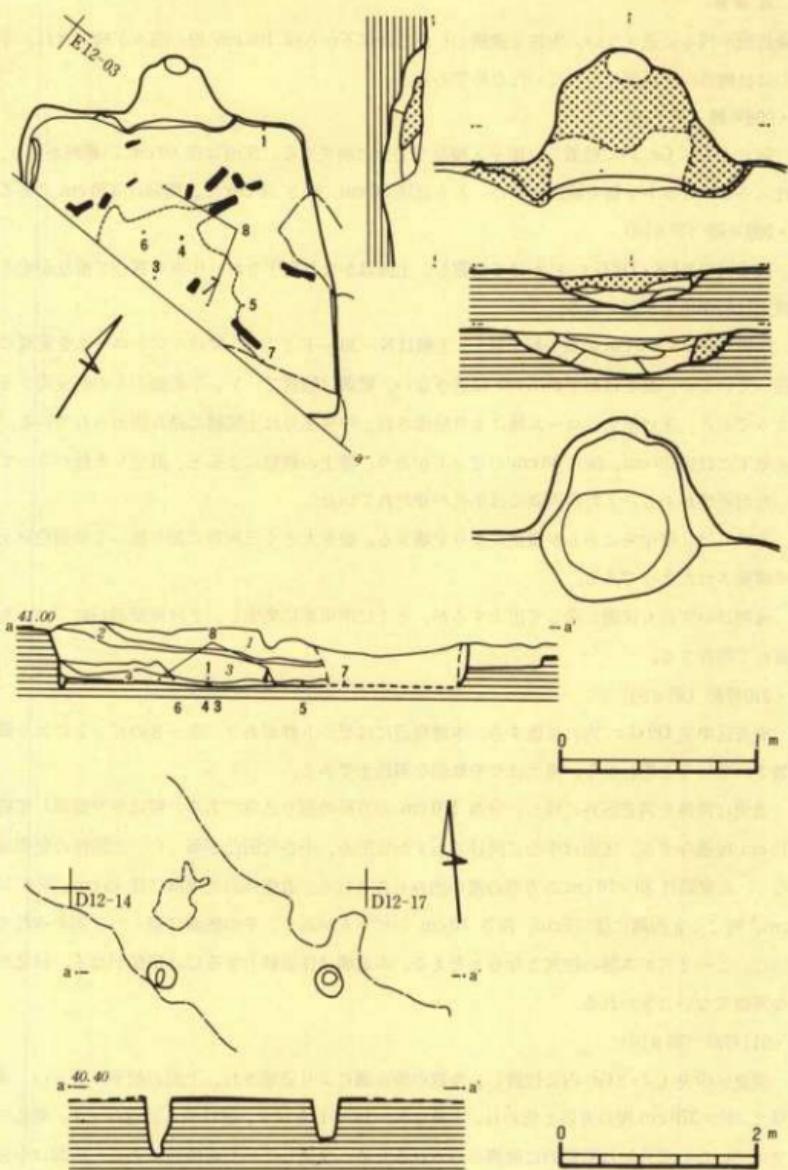
カマドは北壁中央に、壁を四角形に掘り抜いて、灰白色粘土で作られる。本体は屋外にあり、袖の先端は壁に貼付される。長さ75cm、両袖幅は145cmを測る。カマドの上面には003号跡の貼床が載り、押圧のため全体に破壊される。このため細部の模様はわからない。遺物は被災のためか、完形品が多く遺存する。いずれも床面に接しているが、3～7は原位置で押し潰れた状態で、8は破片が流入したように、またカマド内には2が打ち砕かれて補強用に使われた状態で出土した。

#### ・006号跡

欠番

#### ・007号跡

調査区東端のD12Gr.内に位置するが、削平や根切溝により完全に破壊され、わずかに床の



第7図 005・008号跡実測図

### 住居跡

硬質面が残るに過ぎない。本跡を遺構としたのは床下から径 100 cm 程の凹みが検出され、うちには数点の穴が埋められていたためである。

#### ・008号跡（第7図）

同じく C12 Gr. 内に位置し、削平・攪乱で完全に消失する。床面は径 60 cm の範囲が残り、柱穴らしいビット 2 個も検出された。ともに径 30 cm、深さ 50 cm で、間隔は 170 cm である。

#### ・009号跡（第8図）

調査区中央 C8・D8 Gr. にかけて位置し、上面はかなり削平され、中央を貫いて攪乱が走る。覆土は暗褐色土が主である。

遺構は 310×355 cm の長方形を呈し、主軸は N-30°-E を示す。壁はソフトロームを垂直に掘っているが、高さはわずか 5 cm に過ぎない。壁溝は幅狭で「V」字断面のものが全周するようである。床は粘土、ローム塊により貼床され、中央部分は土間様に踏み固められている。南壁下には径 30 cm、深さ 30 cm のビットがあり、覆土の観察によると、直立した柱が立っていた可能性がある。また南西隅には小孔が穿たれていた。

カマドは北壁中央にあるが攪乱により全壊する。壁を大きく三角形に掘り抜いて淡褐色粘土で構築されたようである。

遺物はいずれも床面に接して出土するが、とくに南東部に集中し、2 は東壁沿いに 2 cm も離れて散在する。

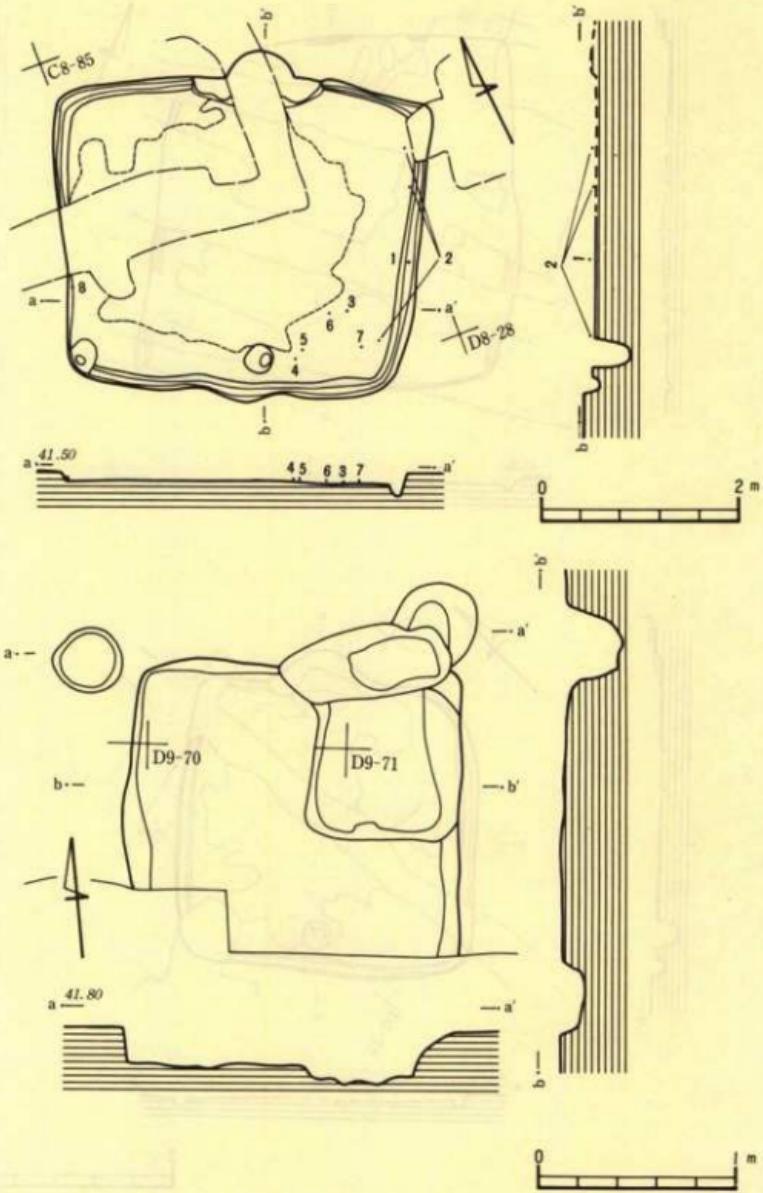
#### ・010号跡（第8図）

調査区中央 D9 Gr. 内に位置する。本跡周辺にはビット群があり、2~3 のビットにより破壊されていると思われる。覆土はやや軟弱な黒色土である。

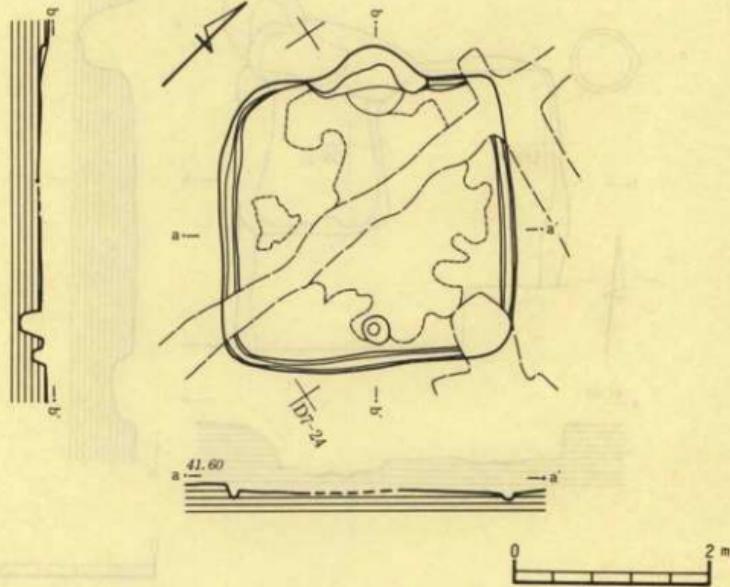
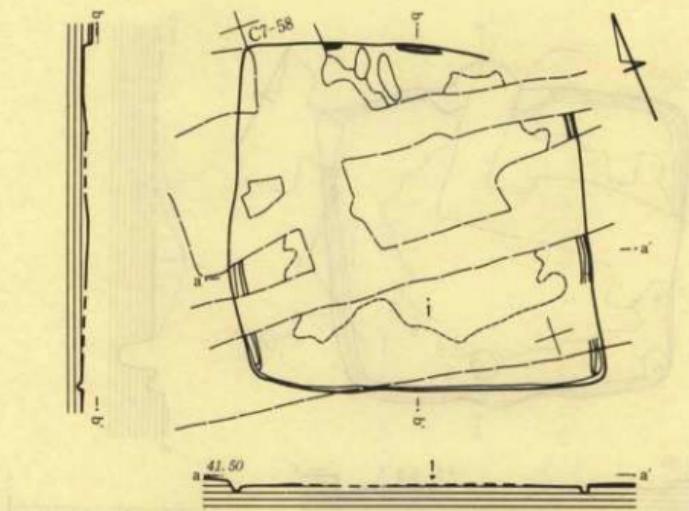
遺構は南側を調査区外に残し、東西 170 cm の方形の掘り込みである。壁はやや傾斜して約 15 cm 程遺存する。床面は中心に向けてわずかに凹み、小さな凹凸が著しい。土間様の堅面ではなく、北東隅は 80×70 cm の方形の浅い凹みもみられる。遺構外の北東隅に径 45 cm、深さ 35 cm、同じく北西隅に径 35 cm、深さ 10 cm のビットがあり、その底面は堅くつき固められていた。この 2 穴が本跡の柱穴となると考える。本遺構は住居跡とするには根拠がなく、日常的な施設でないと思われる。

#### ・011号跡（第9図）

調査区中央 C7・8 Gr. 内に位置し、多数の攪乱溝により破壊され、上面の削平も著しい。遺構は 350×370 cm 程の方形と思われ、主軸は N-18°-E を示す。壁は殆んど遺存せず、攪乱を受けていない部分には断続的に壁溝がみられるため、全周していた可能性がある。床面は中央部に堅面がみられるが、凹凸が著しい。北壁中央には焼土の痕がわずかにみられ、カマドの存在が知られた。

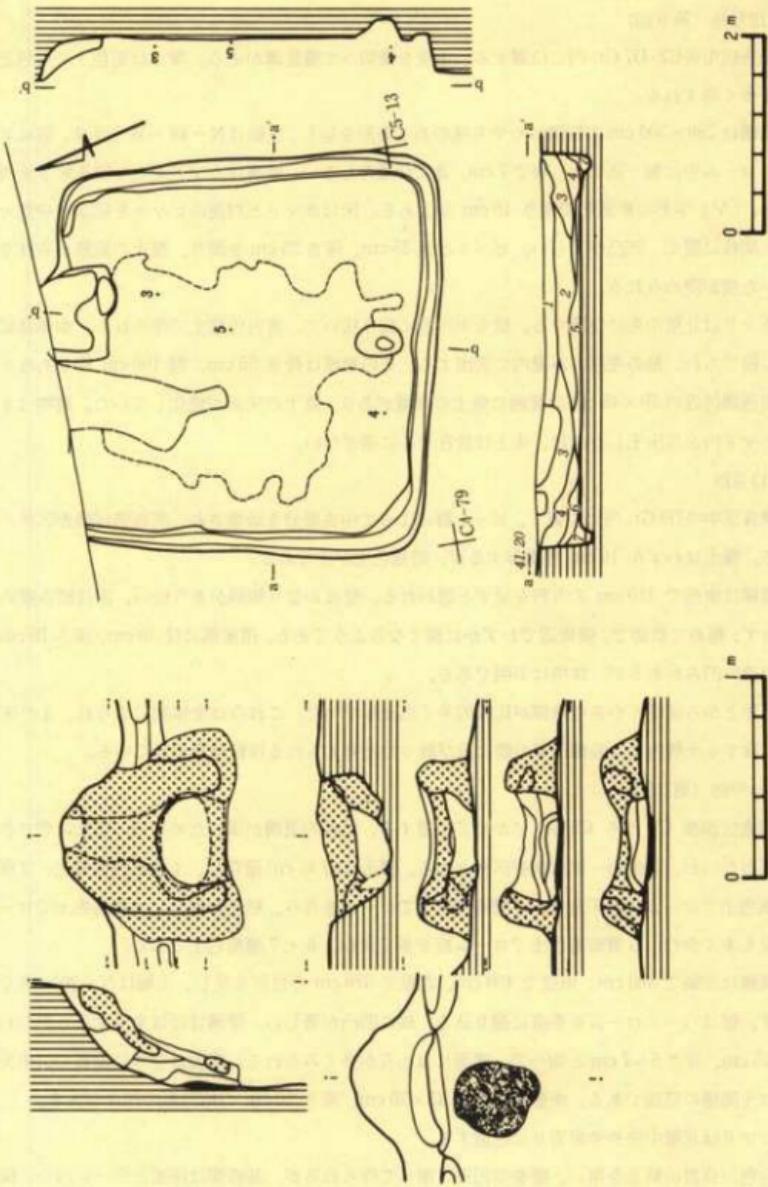


第8図 009・010号跡実測図



第9図 011・012号跡実測図

第10圖 014號地質測圖



・012号跡（第9図）

調査区中央C7・D7 Gr. 内に位置する。中央を横切って擾乱溝が走る。覆土は褐色土で黒色土粒が多く含まれる。

遺構は280×300 cm の四隅はやや丸味のある方形を呈し、主軸はN-48°-Wを示す。壁はソフトローム中に掘り込まれ、南で7 cm、北では遺存しない。壁溝はカマドをもつ壁を除き全周する。「V」字形の断面形で深さ10 cm 以上ある。床はカマドと対面のピットを結ぶ中央部分が土間様に堅く、凹凸が著しい。ピットは径25 cm、深さ25 cm を測り、覆土の観察から柱を抜いた痕が認められる。

カマドは北壁中央に位置する。壁を半円形に掘り抜いて、黄白色粘土で作られる。本体は屋外に設けられ、袖の先端のみ屋内に突出する。その規模は長さ55 cm、幅100 cm 程であろう。

南西隅付近の70×45 cm の範囲に焼土の堆積があり、直下の床面が焼化していた。遺物は4がカマド内から出土した他は、床上は散在するに過ぎない。

・013号跡

調査区中央D9 Gr. 内に位置し、ピット群によって中央部分を破壊され、南西隅は調査区外となる。覆土はわずか10 cm 程遺存するが、暗褐色土が主である。

遺構は東西で310 cm の方形を呈すと思われる。壁はかなり傾斜があり脆い。床は踏み固められず、極めて軟弱で、壁周辺でわずかに深くなるようである。南東隅に径30 cm、深さ15 cm 程の浅い凹みがあるが、性格は不明である。

床面上からは極く小さな鉄滓が比較的多く出土していた。これらは全体的にみられ、また床面に接する土層内には鍛錬作業の際に飛び散ったと考えられる鉄粉が含まれている。

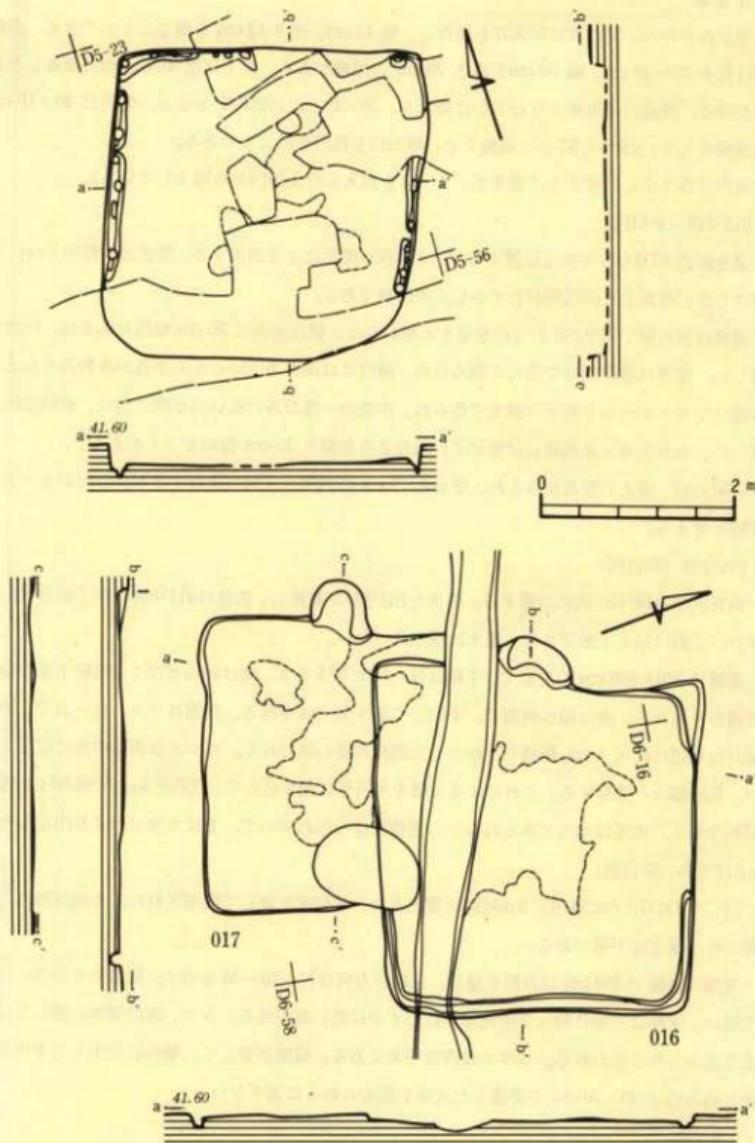
・014号跡（第10図）

調査区西部C4 から C5 Gr. にかけて位置する。比較的遺構が深いため周辺の擾乱に余り影響されないが、北壁の一部は調査区外となる。覆土は約40 cm 遺存し、1層黒色砂質土、2層暗褐色土でローム粒若干含む、3層暗褐色土でロームを含み、粘性が強い、4層褐色土でローム粒を多く含む、5層暗褐色土でローム粒を多く含む、6・7層褐色土である。

遺構は主軸で380 cm、南壁で400 cm、北壁で370 cm の台形を呈し、主軸はN-20°-Eを示す。壁はハードロームを垂直に掘り込み、縦に凹凸が著しい。壁溝はほぼ全周すると思われ、幅15 cm、深さ5~7 cm と均一で、底面には小孔が多くみられる。床面は全体に硬質で、中央部は土間様の堅面である。南壁下中央に45×30 cm、深さ20 cm の楕円形の凹みがある。

カマドは北壁中央やや東寄りに位置する。

黄白色の良質の粘土を用い、壁を半円形に削って作られるが、基底部は床面と同一レベルに保たれる。本体は長さ90 cm、幅105 cm で、その前面には長さ35 cm、幅60 cm の半円形の焚



第11図 015・016・017号跡実測図

#### 住居跡

出部がみられる。焚口には前天井が遺存し、幅45cm、高さ12cmを測ることができる。燃焼部は長さ35~40cm、幅50cm、高さ20cmの規模があり、直下に径40cm程の発達した火床が残る。煙道口は火床よりわずかに高まり、30×10cmの梢円形となる。煙道は20×10cmの規模をもち、25°から55°へと屈曲する。煙出口も梢円形のようである。

遺物は覆土中に散在するに過ぎず、4・5も流入した土層内から出土している。

#### ・015号跡（第11図）

調査区西部D5 Gr. 中央に位置するが、8割程が擾乱により消失する。覆土は一部で20cm遺存するが、擾乱土との区別がむづかしく不明瞭である。

遺構は東西幅で320cmの方形を呈すと思われる。壁は垂直に20cm程掘り込まれ、凹凸が著しい。壁溝は遺存部分で殆んど認められ、溝内には深さ6~15cmの小孔が多数みられる。床面はソフトロームと若干の混土で作られ、中央の一部のみに堅い面が残る他は、軟弱で凹凸著しい。なお北東・北西隅には壁にくい込むような深さ15cm程のピットがある。

北壁に粘、焼土の散布がみられ、壁から75cmの内側に火床が遺存するが、これがカマドの痕跡と考える。

#### ・016号跡（第11図）

調査区中央D6 Gr. 内に位置する。中央を202号跡が縦断し、南壁は017号跡の床下から検出された。土面は殆んど削平され、覆土は残っていない。

遺構は320×330cmの方形で、主軸はN-73°-Wを示す。壁は殆どなく、東壁下を中心に壁溝がみられる。溝は箱形断面で、平均して深さ10cmを測る。床面はソフトロームで、中央部分は周辺に比べ2cm程盛り上がり、土間様の堅い面となる。カマドは西壁中央に位置するが、基底部のみ遺存する。これによると壁を半円形に掘り込んで、灰白色粘土で幅80cm程の両袖を築く。火床は殆どみられない。遺物はほんのわずかで、1はカマド上より出土した。

#### ・017号跡（第11図）

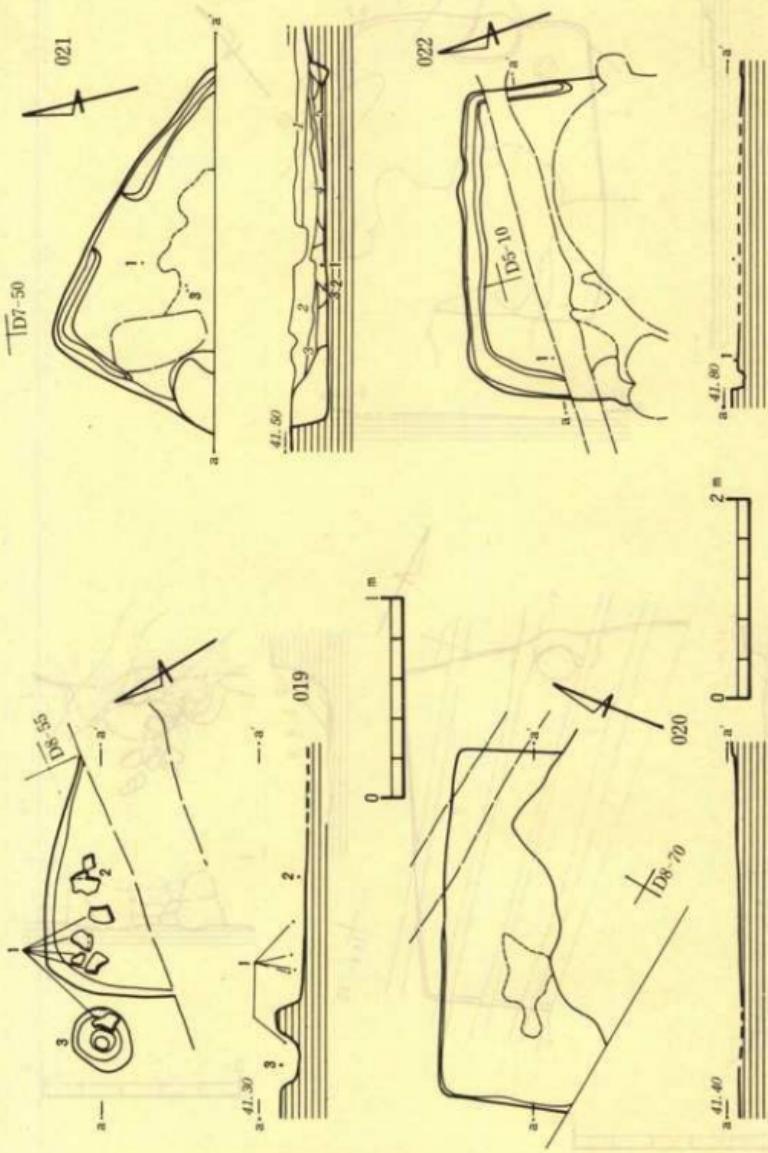
同じくD6 Gr. 内にあり、016号跡の覆土上に一部貼床を施して構築された。上面は殆んど削平され、覆土は不明である。

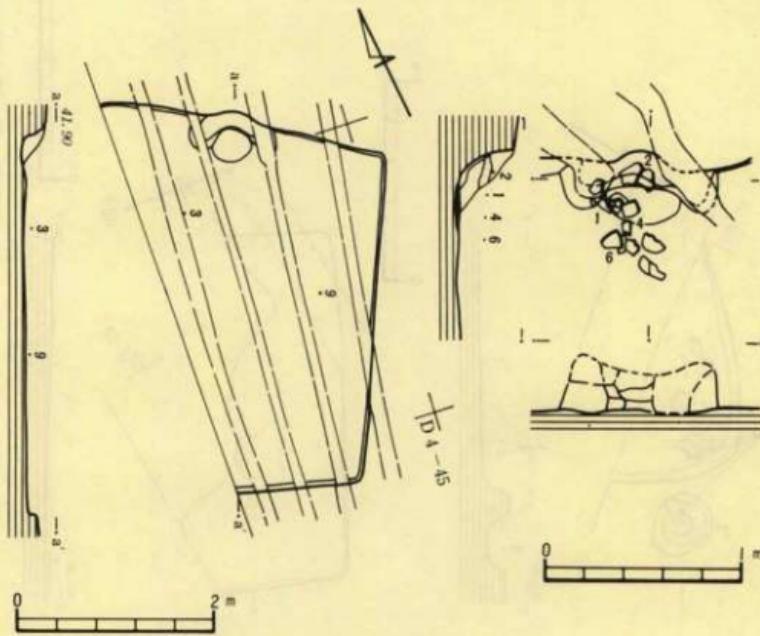
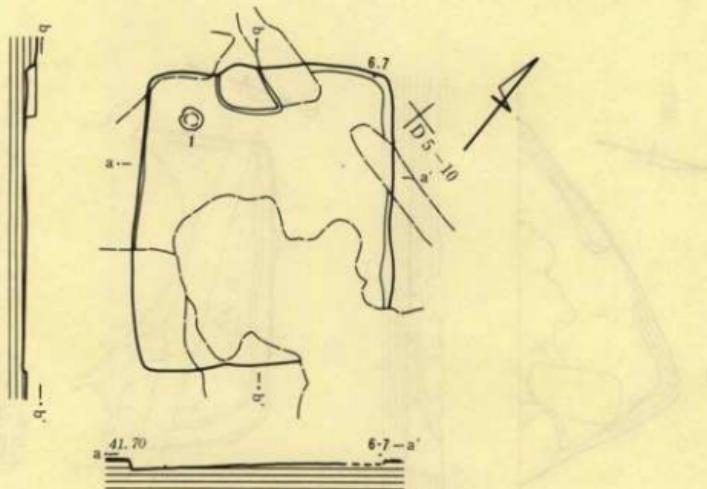
遺構は主軸で300cmの方形を呈し、主軸の方向はN-70°-Wを示す。壁はわずか2~3cmで脆い。床面は主軸に沿って中央部分にわずかに堅い面が残るのみで、床の構築に際しては粘土を混入したと思われる。カマドは西壁中央にある。破壊が著しく、屋外に突出した半円形の掘り込み内に40×30cmの発達した火床が認められるに過ぎない。

#### ・018号跡

調査区中央D7 Gr. 端に位置するが、殆んど削平、破壊され、150×40cm程の範囲内に土間様の床面が残るに過ぎない。本跡の付近からは鰐の羽口片が検出されたが、伴出するとは断じ難い。

第12圖 019・020・021・022号測量圖





第13図 023・024号跡実測図

## ・019号跡（第12図）

D8 Gr. のビット群により完全に破壊された遺構である。しかし北東隅部分に遺物が集中して出土したことから住居跡であることが確認できた。遺構は主軸で約 300 cm の方形と考えられ、カマドの位置から N-45°-W を示すと判断した。北東隅では壁が 15 cm 程遺存するが、他はわずかにその痕跡を残すに過ぎない。床も軟弱で、カマド前に堅い面を認めるのみである。カマドは西壁に設けられるが、焼土が散布し全体の様相は明らかでない。

## ・020号跡（第12図）

同じく D7・D8 Gr. 内のビット群に破壊された遺構である。わずかに北壁の一部が遺存するに過ぎず、これによると 1 辺 340 cm 程の住居跡が考えられる。壁は 5 cm 程の高さを残し、床は一部に土間様の堅面を認める。

## ・021号跡（第12図）

調査区中央南端 D7 Gr. 内に位置し、大半は調査区外にある。覆土は 1 層暗褐色土、2 層黒褐色土、3 層暗褐色土で有機質に富む、4 層褐色土で山砂を多く含む、5 層褐色土でローム粒を含む。

遺構は北東隅部分のみの調査のため、規模は明らかでないが、方形を呈すであろう。壁は垂直に 20 cm 程掘り込まれ、浅い壁溝がめぐる。床面はカマドを中心に踏み固められている。カマドは淡黄褐色粘土で、壁を三角形に切って作られるが、左半部調査区外のため構造は不明である。

遺物は少なく、図示したものはいずれも覆土中層から出土した。

## ・022号跡（第12図）

調査区西部 D5 Gr. を中心に位置するが、中央を擾乱溝が走り、南半部は炭窯により破壊される。覆土は黒褐色土であるが、殆んど削平される。遺構は北壁で長さ 300 cm を測り、方形と思われる。主軸は N-45°-W を示す。壁はハードローム上面まで掘り込まれるがわずか 10 cm 程の高さに過ぎない。壁溝は少なくとも半周するよう、幅 15 cm、深さ 5~7 cm の箱形断面である。床は全体に余り堅くなく、カマド前面にのみ踏み固められた痕跡がある。カマドは西壁に、壁をわずかに切って、灰白色粘土で構築されるが、基底部が残っているに過ぎない。

遺物はほぼ床面に接して、数点出土する。1 はカマド前に、2 は北壁直下より検出された。

## ・023号跡（第13図）

調査区西端に近く、D4 Gr. 内に位置する。上面は削平が著しいうえに、炭窯により破壊される。覆土は暗褐色土でローム粒が多く含まれ、かなり堅い層である。

遺構は 300×260 cm の方形で、主軸の方向は N-35°-W を示す。壁は 15 cm 程遺存するが、全体に傾斜が著しい。床は全体に堅くしまり、凹凸が著しい。また北東隅部は一段高まっている。

## 土 壤

る。柱穴等は確認できず、カマドも西壁に痕跡が残る程度である。

### ・024号跡（第13図）

調査区西南部に位置する。南半分は調査区域外にあり未調査である。覆土はやや明るい黒褐色土を主体とするが、ゴボウ溝が縱走しているため不明瞭である。

遺構は北壁で350cmを計る方形で、主軸の方向はN-31°-Eを示す。壁は25cm程遺存し、全体に垂直である。床面は中央部分がやや盛り上がり気味で土間様となる。北壁と東壁の一部にやや深めの壁溝が認められる。カマドは西壁に、壁を三角形に掘り抜いて設けられる。袖幅は80cmで、黄灰色粘土で構築されている。燃焼部は幅35cm、奥行45cmで、火床は平坦である。煙道は30°～65°と屈曲しながら上昇する。

遺物の多くはカマド上および右脇に集中して出土した。とくに甕はカマド前面の天井懸架に利用された状態を示す。また13の刀子は北壁中央直下に床に接して検出された。

### ・025号跡

調査区中央付近に位置し、北東隅がわずかに残る。上面は殆んど削平されている。遺構の規模は不明だが、北壁が280cm程認められる。床面は比較的軟弱で、西壁には白色粘土で作られたカマドの基部が遺存する。

## 2項 土 壤

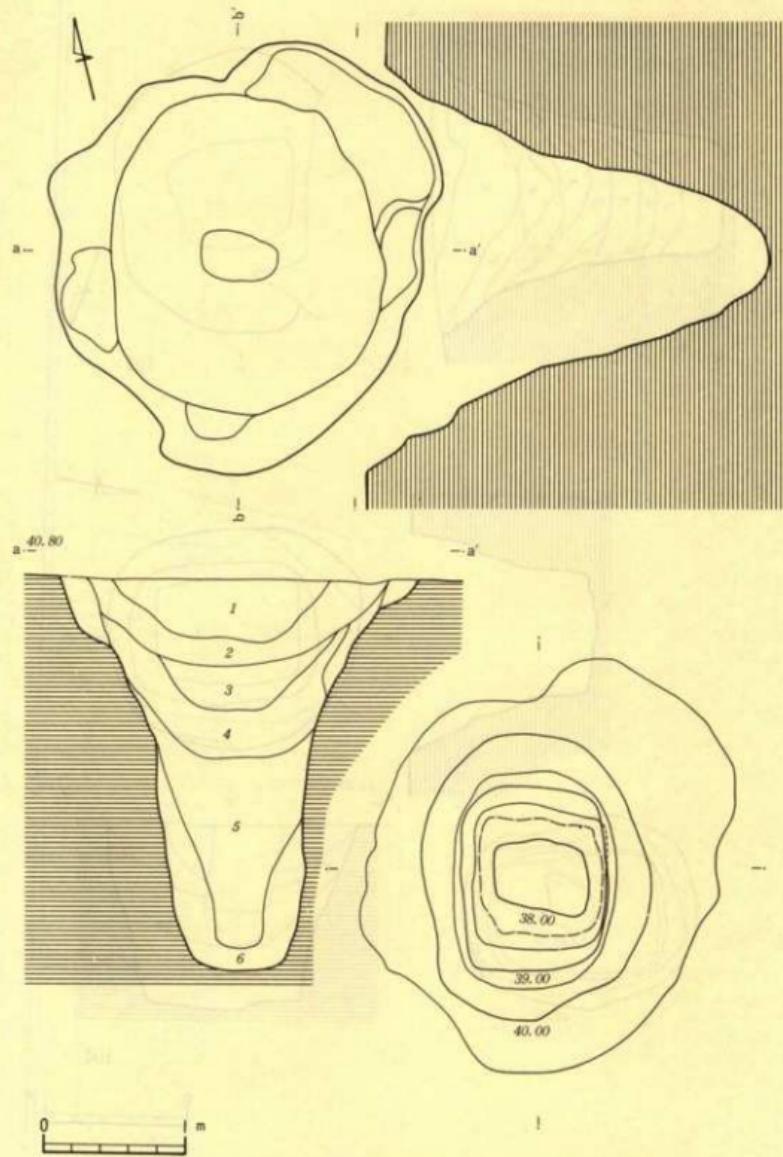
土壤、ピットの類は、総計75基にも及ぶが、その形状や規模は千差万別である。本項ではこれらの土壤を共通する性格で大別して概要を記すことにする。記述の順序はa位置、b規模(平面形の縦×横×深さ) c特徴、d覆土とする。

### ・大型で深い土壤

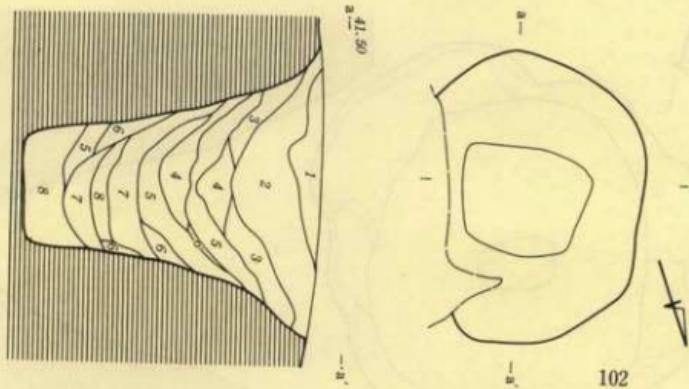
101号跡（第14図） a北東端、C12 Gr. 内、b梢円形、270×250×250cm、c上面の2ヶ所にテラス状の張り出しを設け、全体的に断面はロート状となる。深さ100cm程から下は130×100cmの長方形となり、底面は丸い。d 1層暗褐色土、2層褐色土ローム多く含む、2'層とくに軟弱、3層赤褐色素粒土、4層褐色土、5層大粒子の褐色土灰色粘土塊を含む、6層黄色素粒土、5、6層はとくに軟弱である。

102号跡（第15図） a南東端、B13 Gr. 内、b梢円形、200×160×200cm、c断面ロート状を呈し、底面は75×80cmの方形となる。d 1～3層暗褐色土または黑色土の自然埋没土層、4層黒色粘性土で特異な堆積土、5層黄色ローム粒・ローム塊、8層褐色素粒土と黄灰色ローム塊の層で崩落を示す。6層黒色土ローム粒を多く含み、壁の崩れや、短時間の流入を示す。7層暗褐色土で褐色土、ローム塊などを含み、崩落間の自然間層である。

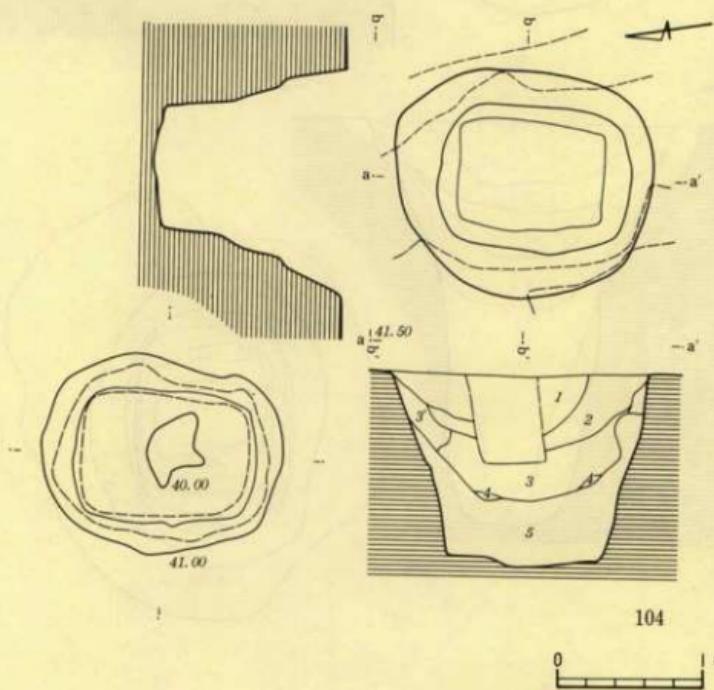
104号跡（第15図） aD10 Gr. 中央、b梢円形 180×155×130cm、c底面 100×70cm の長



第14図 101号跡実測図

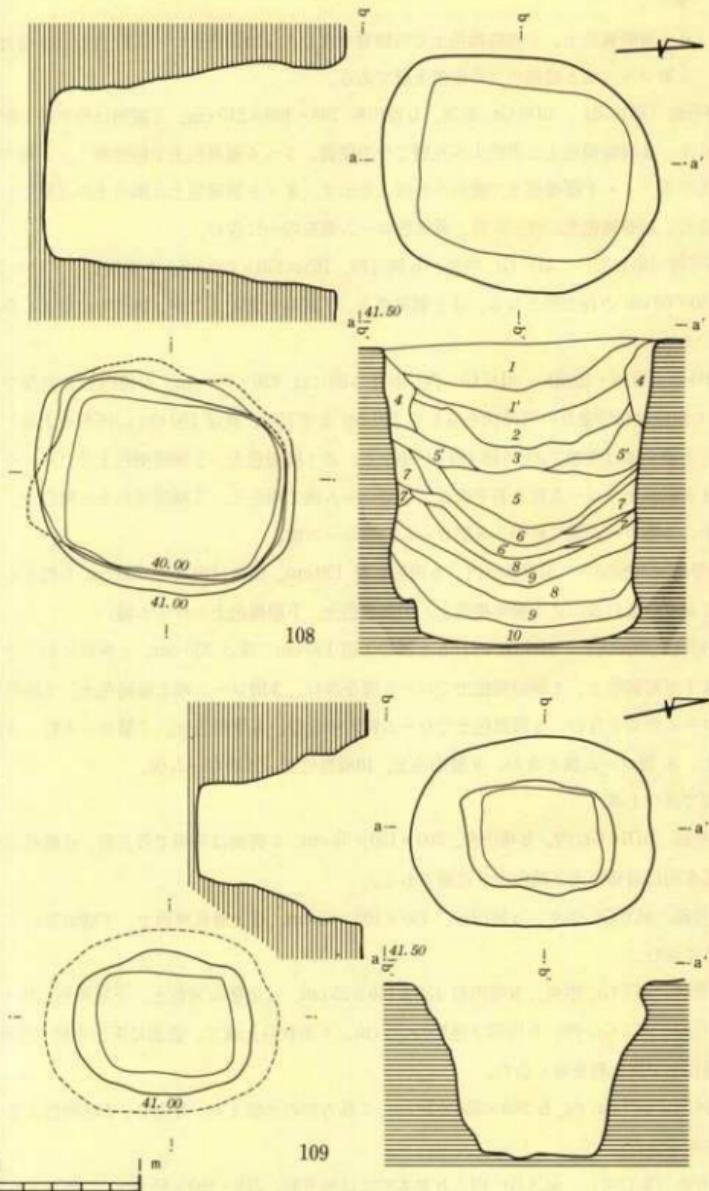


102



0 1 m

第15図 102・104号跡実測図



第16図 108・109号跡実測図

方形、d 1層暗褐色土、2層暗褐色土で有機質を含む、3層褐色土ローム粒含む、4層有機黒色土、5層ローム塊と暗褐色土の崩落土層である。

108号跡（第16図） aD8 Gr. 東端、b 楕円形  $200 \times 160 \times 210$  cm、と底面はやや長方形となる。d 1～3層暗褐色土と黒色土の互層でやや硬質、5～6層黒色土で粘性強く、下層では真黒色化する。4・7層褐色土で壁からの流入を示す。8・9層褐色土と黒色土の互層でローム粒を含む、10層褐色土、ローム粒、黄灰色ローム塊を均一に含む。

109号跡（第16図） aD7 Gr. 中央、b 楕円形、 $165 \times 130 \times 120$  cm、c 断面ロート状を呈し、底面  $80 \times 60$  cm の長方形となる。d 上層黒色土、下層褐色素粒土だが、調査中に崩落し詳細は不明である。

180号跡（第18・19図） aD7 Gr. 内、b 基本的には  $420 \times 250$  cm、の楕円形で最深で  $220$  cm、c 東側は10段余りの階段状を呈して  $150$  cm まで下り、直径  $100$  cm の円形の土壤と連絡する。土壤全体は東端で202号跡（溝）と連なる。d 1層褐色土、2層暗褐色土でローム粒を含む、3層黒色土でローム粒を若干含む、4層ローム塊と褐色土、5層暗褐色土と褐色土、6層褐色土、7層ローム塊で軟弱、8層ローム粒とローム塊。

182号跡（第20図） aD2 Gr. 内、b 円形、径  $120$  cm、深さは現状で  $200$  cm を超える。c 垂直に掘り込まれる。d 上層暗褐色土、中層黒色土、下層褐色土とローム塊。

195号跡（第20図） aD7 Gr. 内、b 上面で1辺  $130$  cm、深さ  $230$  cm、と垂直に掘り込まれる。d 1層暗褐色土、2層暗褐色土でローム塊を含む、3層ローム塊と暗褐色土、4層暗褐色土でローム粒若干含む、5層黒色土でローム粒若干含む、6層黒色土、7層ローム粒、8層黒灰色土、8'層ローム塊を含む、9層褐色土、10層黒色土、12層ローム塊。

#### ・大型で浅い土壤

103号跡 aD10 Gr. 内、b 楕円形、 $200 \times 130 \times 55$  cm、c 底面は平坦で長方形、d 改乱が多いが、基本的に暗褐色土と褐色土の互層である。

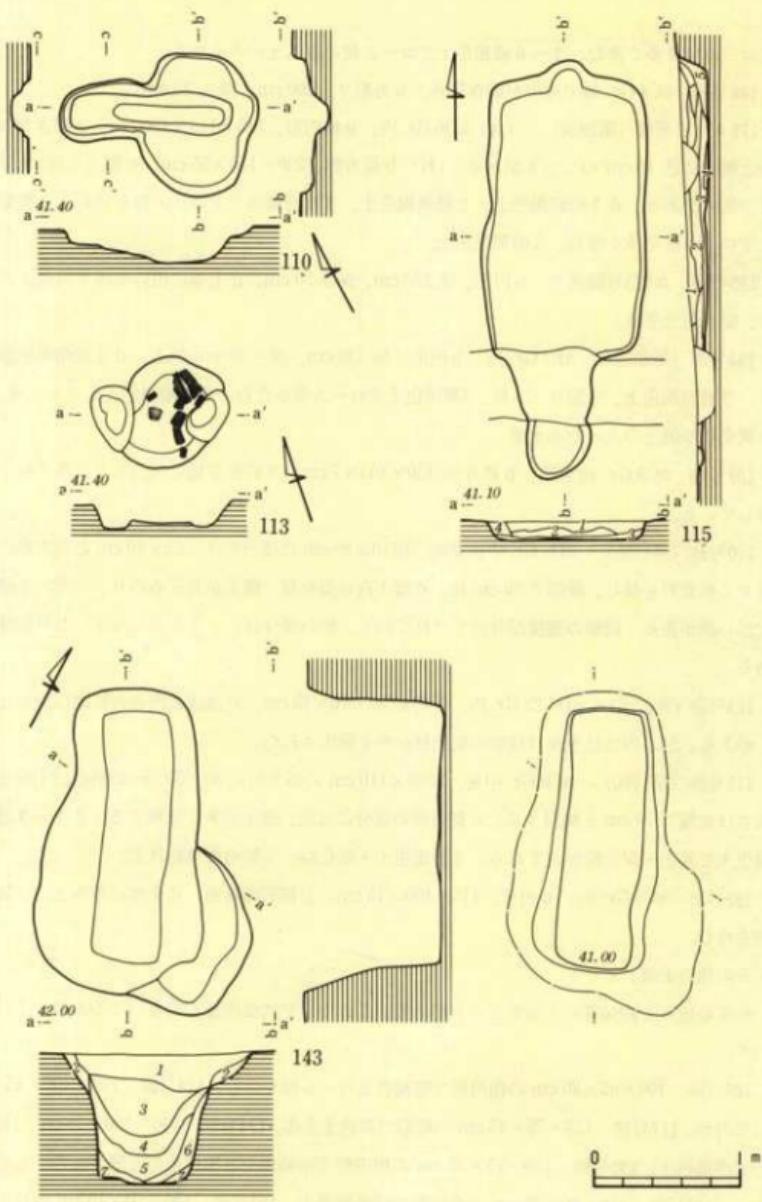
120号跡 aC6 Gr. 中央、b 楕円形、 $150 \times 105 \times 65$  cm、d 上層真黒色土、下層暗褐色土ローム粒多く含む。

124号跡 aC6 Gr. 中央、b 楕円形  $150 \times 100 \times 25$  cm、d 上層暗褐色土、下層黒色粒性土。

127号跡 aC7 Gr. 内、b 円形？径  $150 \times 35$  cm、c 皿状の土壤で、底面に灰白色粘土を貼付、d 暗褐色土で炭化粒を多く含む。

142号跡 aC7 Gr. 内、b  $260 \times 230 \times 30$  cm、c 長方形の土壤2個が重なる、d 暗褐色土でローム粒を若干含む。

143号跡（第17図） aC6 Gr. 内、b 基本的には長方形、 $210 \times 100 \times 85$  cm、c 断面ロート状を呈し、一部は崩れている。d 1層暗褐色土、2層暗褐色土でローム粒を含む。3層暗褐色土



第17図 110・113・115・143号跡実測図

でローム粒を多く含む、4～6層褐色土でローム粒の混入土が多くなる。

148号跡 aC4 Gr. 端で大半が調査区外、b 方形？、260 cm、深さ 25 cm。

179 A. B 号跡 (第20図) (A) aD6 Gr. 内、b 楕円形、140×110×100 cm、と深さ 50 cm の土壤内に径 40 cm のピットがある。(B) b 長方形、230×110×55 cm、c 覆土上面に017号跡の貼床がある。d 1 層暗褐色土、2 層黒褐色土、3 層暗褐色土でローム粒を含む、4 層褐色土でローム粒を多く含む、5 層黒褐色土。

185号跡 a 023号跡床下、b 円形、径 120 cm、深さ 50 cm、d 上層に山砂や焼土が含まれるが、暗褐色土主体。

194号跡 (第20図) aE2 Gr. 内、b 円形、径 130 cm、深さ 90 cm 以上、d 1 层暗褐色砂質土、2 层暗褐色土、3 层ローム粒、4 层黑色土でローム塊を含む、5 层暗褐色土とローム塊。

・炭化物や焼土の入った小土壤

107号跡 aC9 Gr. 南東端、b 長方形 130×105×7 cm、c 底面平坦で凹凸あり、炭化粒が堆積している。

110号跡 (第17図) aD7 Gr. 中央東端、b 110×80 cm の楕円形に、55×40 cm の長方形が接合する柄鏡形を呈し、最深で 20 cm 程、c 覆土内に炭化材、焼土が若干みられ、両部分を結んで浅い溝が走る。両部の連接部分はくびれていて、柄の部分はトンネルになっていた可能性がある。

113号跡 (第17図) aD7-22 Gr. 内、b 円形 80×70×15 cm、c 皿状の凹みの両端に浅いピットが入る。凹み内には生焼け状態の炭化材が多く検出された。

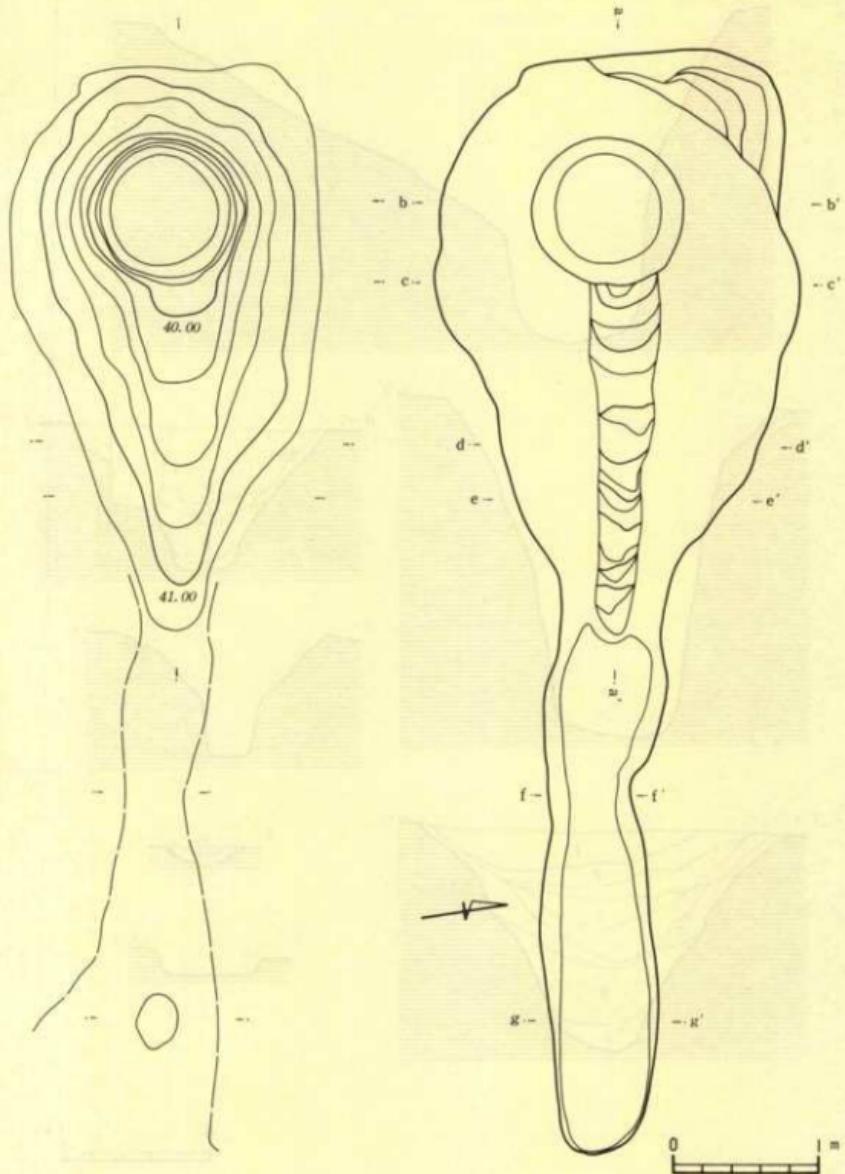
115号跡 (第17図) aC6 Gr. 中央、b 200×110 cm の長方形に 80×50 cm の柄の付く形で、深さは北端で 20 cm と傾斜する。c 長方形の部分には灰、焼土が多く堆積する。d 1～3 层暗褐色土で焼土・炭化粒が含まれる。4 层褐色土・炭化粒、5 层暗褐色粘性土。

192号跡 aC3 Gr. 内、b 円形、115×100×15 cm、と箱形の断面、d 全体に黑色土で、炭化粒を含む。

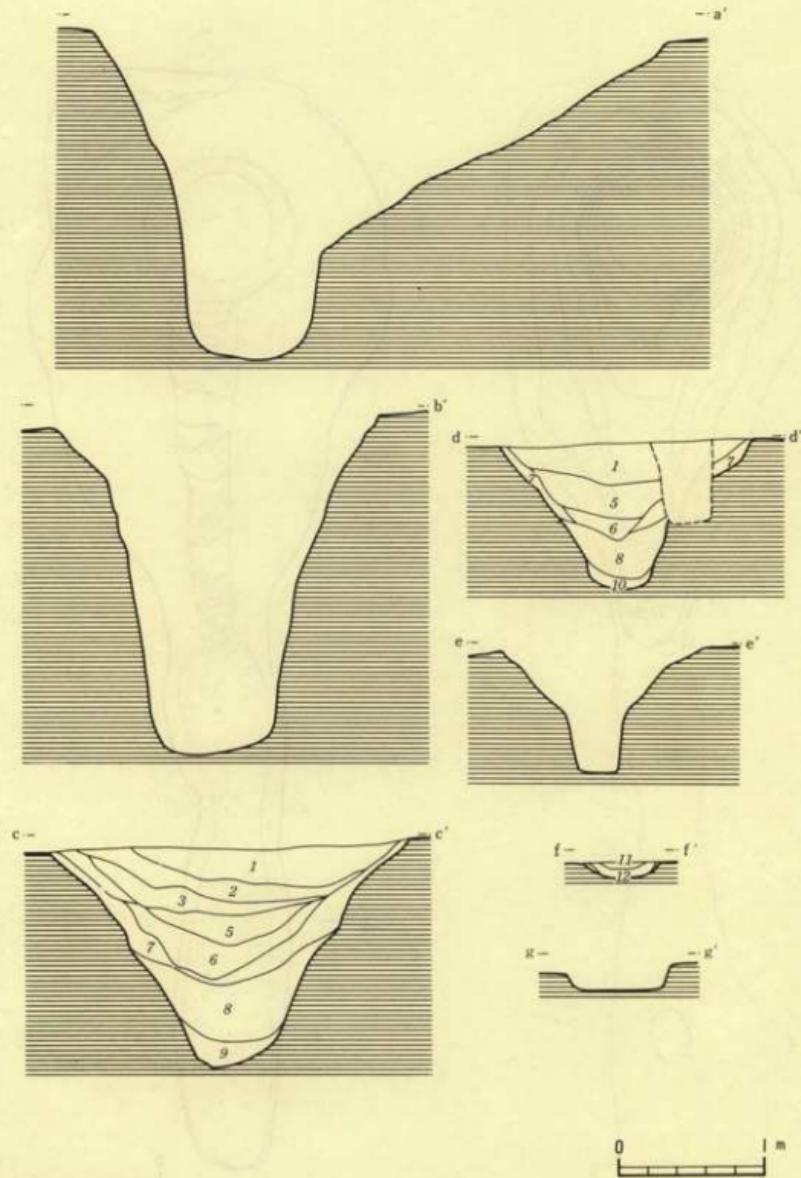
・その他の土壤、ピット

前記の他にも約50基の土壤やピットがある。このうちで代表的なものをいくつか取り上げておく。

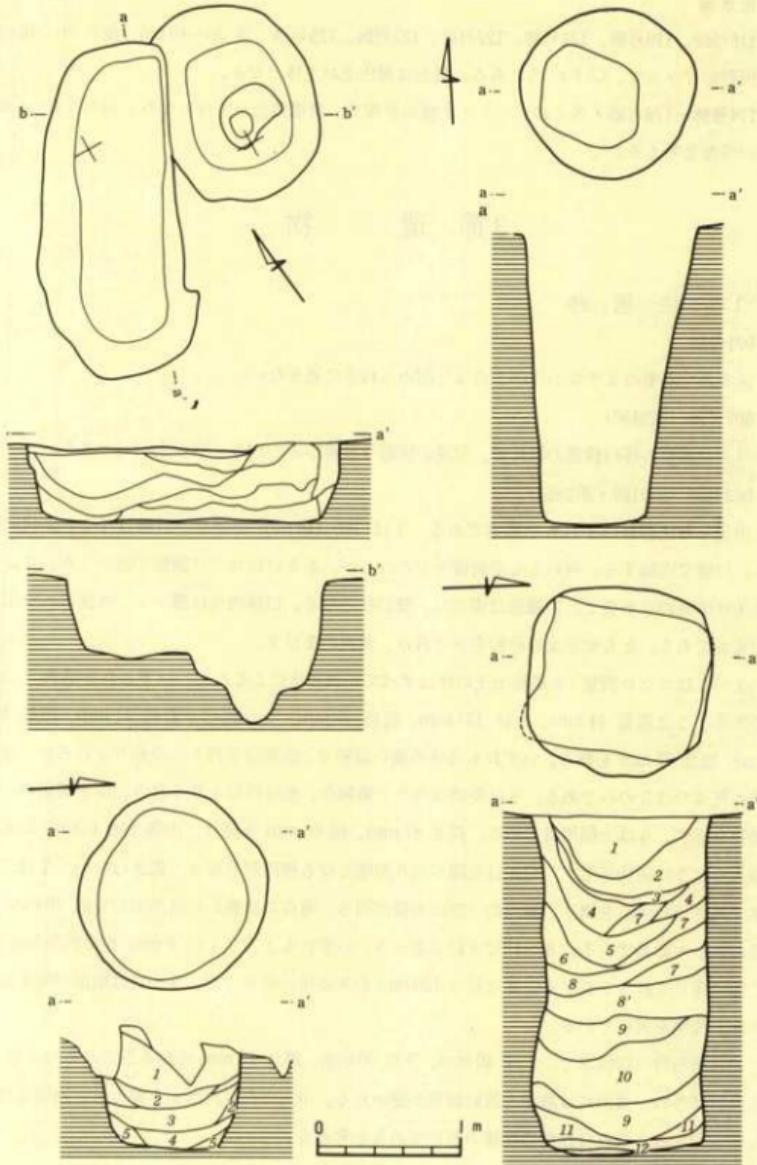
106号跡 100×65×30 cm の楕円形で暗褐色土ローム粒を含む。114号跡 130×100×15 cm の楕円形。117号跡 120×75×45 cm の卵形で黒色土主体。124号跡 140×100×15 cm の楕円形で暗褐色土。130号跡 100×75×35 cm の楕円形で暗褐色土と黒色土の互層、底面から壊が出土。147号跡 160×80×25 cm の楕円形で暗黄褐色土。197号跡 105×70×10 cm の楕円形。これらに共通するのは長径 100 cm 以上の浅い楕円形で覆土にもしまりがない。



第18図 180号跡実測図(1)



第19図 180号跡実測図 (2)



第20図 179・182・194・195号跡実測図

## 住居跡

118号跡、119号跡、121号跡、122号跡、123号跡、125号跡 径 30~40 cm、深さ 30~45 cm の円形のピットで、C5 Gr. 内にある。覆土は褐色土が主体となる。

174号跡~178号跡 多くのピット・土壤の重複で、黄褐色土が主体となり、かなり新しい時期の所産と考える。

## 3 節 遺物

### 1項 住居跡

#### • 001号跡

淡黄色の陶器のような小片が2点ほど認められるに過ぎない。

#### • 002号跡 (第28図)

ロクロ調整の壊口縁部の破片で、判読の困難な墨書きがみられる。恐らく「子」である。

#### • 003号跡 (第21図・第28図)

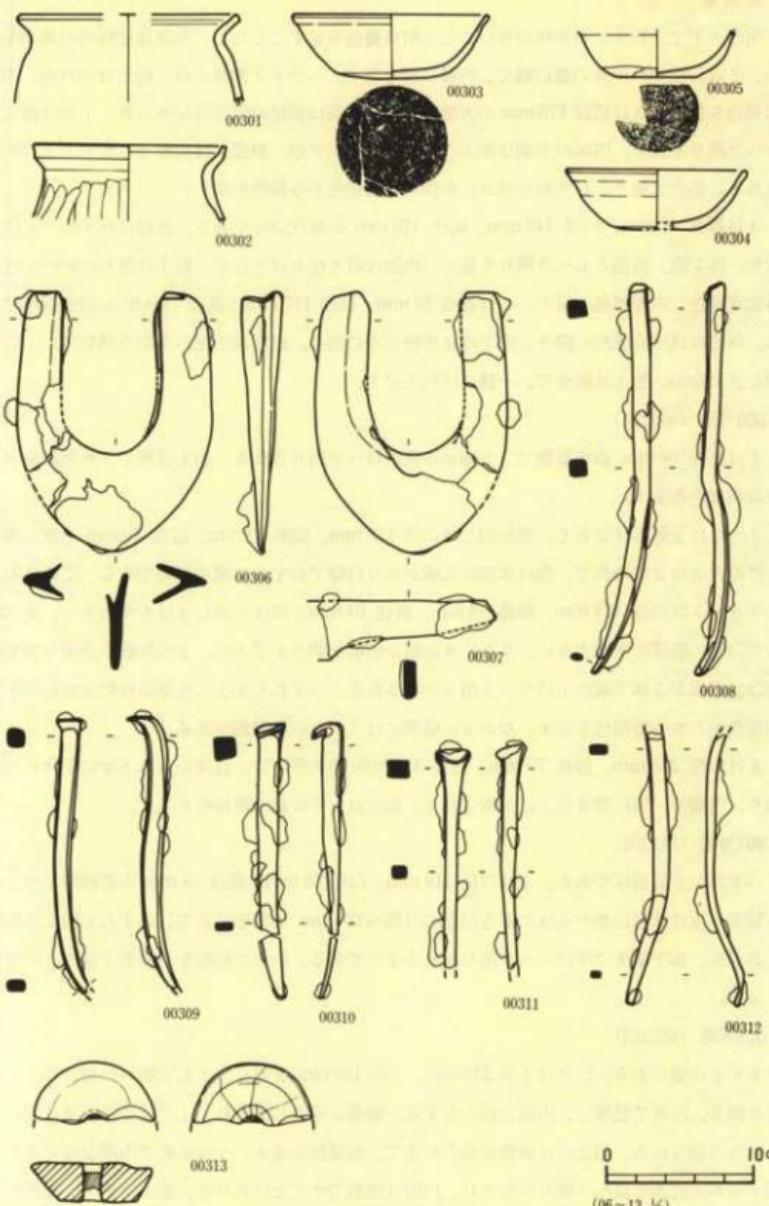
出土した土器はいずれも土師器である。1は口径 146 mm の甕で、口縁は「く」字状に開き、口唇で内傾する。内外とも全面横ナデされるが、あるいはロクロ調整であろうか。2は口径 130 mm の小形甕で、口縁部は直立し、受口状となる。口縁内外は横ナデ、外面はヘラ削りのままである。ともに胎土に砂粒を多く含み、黄褐色を呈す。

3~5はロクロ調整 (本遺跡出土の壊はすべて同調整法によるため、以下これを略す。) の甕である。3は器高 44 mm、口径 134 mm、底径 77 mm、4は同じく器高 41 mm、口径 122 mm、底径 62 mm を測る。いずれも丸味の強い器形で、底部は手持ちヘラ削りされるが、体下端に及ぶのは5のみである。5は堅緻な作りで黄褐色、他は砂粒を多く含み、淡赤褐色から赤褐色を呈す。6は土掘用具である。長さ 87 mm、幅 66 mm を測り、内側は幅 44 mm の木柄が入るように袋状を呈す。刃先は先端が尖り気味となる梢円形を描き、鋭さはない。7は刀子茎で長さ 55 mm を測り、裏面の一部に木質が残る。遺存の状態から区部での刃幅 20 mm と思われる大形品である。8~12は犬釘であろう。いずれも上方で1辺 6 mm 程の角形を呈し、先端に向けて厚さを減する。8は長さ 130 mm の未使用品のようで、9~11は頭部が叩き曲げられ、先端を欠いている。

13は滑石質の紡錘車で、上径 40 mm、下径 30 mm、厚さ 13 mm を測る笠形のものである。全面研磨され、裏面には数条の放射線刻が描かれる。中央の孔は両面から穿たれ、内側には鉄片が遺存する。これは鉄製の軸棒の断片であると考える。

#### • 004号跡 (第22図)

1は口径 268 mm の大形甕である。口唇は受口状に立上がり、ナデ肩となる。器面の調整は



第21図 003号跡遺物実測図

## 住居跡

不明のナデで、胎土に石英粒が多いこと、明黄褐色を呈すことなど、当該器形特有の要素を持つ。2は口径200mmの甕口縁で、内縁に段を有す。ヘラナデ調整され、胎土はやや粗、内面明褐色を呈す。3は底径175mmの大甕である。外面は斜位の叩き目がみられ、下端は横に荒いヘラ削りを施す。内面の下端は布ようの強いナデツケが、胴部には指頭ようのナデ上げがなされる。胎土は粗く、石英粒を含み、全体的に暗褐色から黒色を呈す。

4は器高47mm、口径149mm、底径110mmの塊状の坏である。底部はわずかに丸底となり、体全面、底部ともヘラ削りを施し、内面は磨き仕上げされる。胎土は密だが砂粒を含み、外面赤褐色、内面黒色を呈す。5は器高36mm、口径117mm、底径71mmの須恵器坏である。体部はほぼ直線的に開き、内下端は沈線ように凹む。底部は回転ヘラ削り調整され、切り離し痕はない。胎土は緻密で、一様に灰色を呈す。

### ・005号跡（第22図）

1は底径60mmの小形甕で、下端から底部はヘラ削りされる。胎土は密で、外面赤褐色、内面明褐色を呈す。

2～7は土師器坏である。器形的には口径128mm、器高43mm、底径80mmを測る深めで底の大きな2は特異で、他は体部に丸味があり口縁でわずかに開くものである。このうち、3・5・7は口径124mm、器高38mm、底径64mmとほぼ一致し4はやや大きく、6は浅めで口径、底径の差が大きい。7を除き回転糸切痕が明らかであり、2の回転ヘラ削り調整の他は、底部から体下端に手持ちヘラ削りがなされる。いずれも胎土に少量の砂粒を含むが密で、明褐色からやや暗褐色を呈す。なお5の底部には「人」の墨書銘がある。

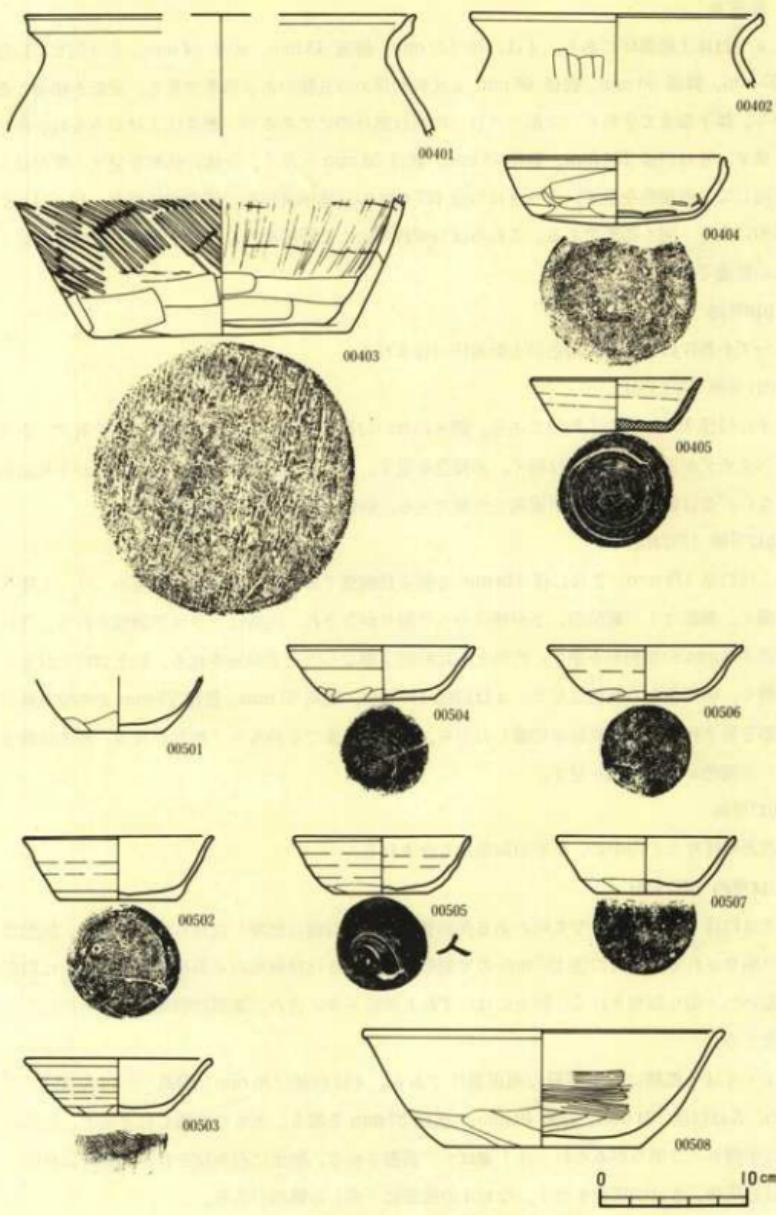
8は口径245mm、器高79mm、底径133mmの大形坏で、底部から体下半に手持ちヘラ削り、内面の一部に磨き仕上げが施される。胎土はとくに良く暗褐色を呈す。

### ・007号跡（第23図）

いずれも土師器坏である。1は口径119mm、口径38mm、底径78mmの直線的に立上がる器形、他は体部にやや丸味のある口径の123～126mmの器形である。いずれも回転糸切離しのち、体下端まで手持ちヘラ削りされるようである。胎土に砂粒をやや多く含み、明褐色を呈す。

### ・009号跡（第23図）

1・2は甕である。口径は1が210mm、2が190mmを測り、ともに短い口縁は「く」字状に開き、口唇で肥厚し、内縁に段を有する。胴部は叩きしめられ、1ではその下半に荒いヘラ削りが施される。胎土には砂粒を含むが密で、明褐色を呈す。3は小形で肉厚な甕である。胴下端から底部にはヘラ削りがなされ、内面は指頭でナデ上げられる。胎土は密で、褐色を呈す。



第22図 004・005号跡遺物実測図

## 住居跡

4～11は土師器坏である。4は口径 122 mm、器高 43 mm、底径 64 mm、5は同じく口径 130 mm、器高 50 mm、底径 66 mm と比較的深めの丸味のある器形である。回転糸切離しののち、体下端まで手持ちヘラ削りされ、内面は部分的にであるが、磨き仕上げがみられ、黒色を呈す。6は口径 134 mm、器高 48 mm、底径 58 mm と深く、全体に鉢形を呈す。整形は1と同じで、赤褐色を呈す。7～9は口径 127 mm の、体中央付近で屈曲する器形、10、11は直線的に大きく開く器形である。これらはいずれも胎土に砂粒を含み、やや粗く、明褐色を呈するのが普通である。

### ・010号跡

わずか数片の中に、黄褐色の土師器坏が含まれる。

### ・011号跡（第23図）

1は口径 139 mm の小形甕である。開きのない口縁は受口状となり、内縁に段を有す。胸部にヘラナデが施され、胎土は粗く、赤褐色を呈す。他に大形の盤状を呈す坏があるが小片に過ぎない。2は鉄棒であり、断面丸く先端で尖る。紡輪の軸のようである。

### ・012号跡（第24図）

1は口径 178 mm、2は口径 149 mm を測る長胴甕である。口縁はともに短かく「く」字状に開く。胸部は1が縦位の、2が横位のヘラ削りがなされ、内面はヘラナデ調整される。3は胴径 243 mm の球胴形を呈す。内外とも比較的丁寧なヘラナデが施される。胎土はいずれもやや粗く、明褐色から褐色を呈す。4は口径 119 mm、器高 43 mm、底径 75 mm のやや丸底の塊形を呈す坏である。回転糸切離しののち、体下端にまで手持ちヘラ削りが及ぶ。胎土は緻密で、赤褐色から黒褐色を呈す。

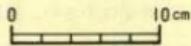
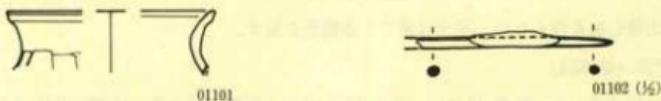
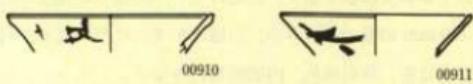
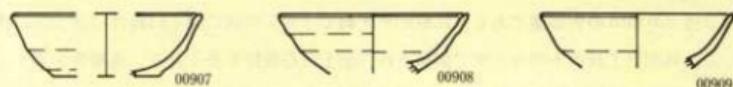
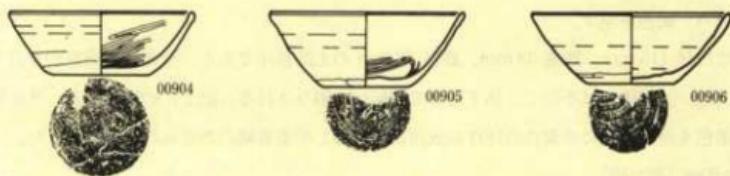
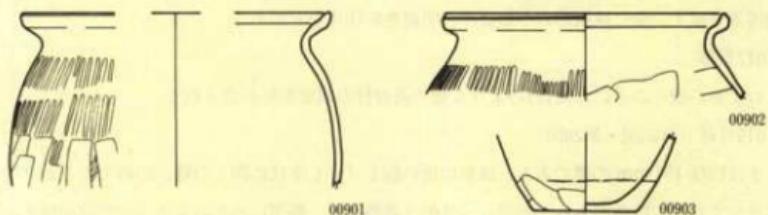
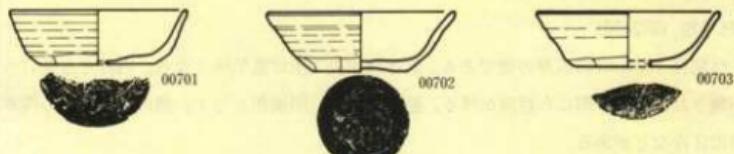
### ・013号跡

内黒の坏片などの中に、鉢形の陶器片も含まれる。

### ・014号跡（第24図）

1は口径 176 mm のやや丸味のある長胴甕である。口縁は肥厚しながら大きく開く、胸部はヘラ削りされる。2は口径 157 mm の寸胴形の甕で、3は球胴形の小形甕である。ともに胸部は荒いヘラ削り調整される。胎土にはいずれも砂粒を多く含み、基調は明褐色で、外面はやや黒変する。

4・5は一直線に開く器形の須恵器坏である。4は口径 130 mm、器高 37 mm、底径 70 mm、5は口径 134 mm、器高 40 mm、底径 82 mm を測る。ともに切離しは不明で、底部のみに手持ちヘラ削りがみられ、体下端はナデ調整される。胎土に石英粒を含み、焼成は良好、4は暗灰色、5は明灰色を呈す。なお4の底部に「亦」の線刻がある。



第23図 007・009・011号跡遺物実測図

## 住居跡

### ・015号跡（第24図）

1は底径 120 mm の肉厚の壺である。底部は中央で上げ底氣味となる。内外とも荒いヘラナデが施され、外面一部に布目痕が残る。胎土は良く、明褐色を呈す。他に台付鉢形の陶器片や、内黒の坏片などがある。

### ・016号跡（第24図）

1は口径 150 mm の丸味のある長胴壺である。口径はゆるやかに立上がり、口唇はつまみ上げたようになり、受口状を呈す。胴部はヘラ削りが施される。胎土は密で、外面明褐色、内面暗褐色を呈す。他に球胴形の小形壺片、明黄色の坏片などがある。

### ・017号跡

わずかの破片の中に、02101のような壺や高台付の須恵器坏が含まれる。

### ・019号跡（第25図・第28図）

1は口径 154 mm の壺である。球形に近い胴と「く」字状に開く口縁、口唇で立上がり受口状をなすなどの特徴がある。胴部はヘラ削り調整され、頭部にハケのようなナデ痕が残る。2は口径 248 mm を測る壺であろうか。口唇は受口状となり、胴部はヘラ削りされる。ともに砂粒を含み、褐色を呈す。

3は口径 115 mm、器高 38 mm、底径 70 mm の土師器坏である。全体に截円錐形を呈し、底が大きい。切離しは不明で、体下端まで回転ヘラ削りされる。胎土に砂粒を含み、外面褐色、内面黒色を呈す。他に赤褐色の坏片の表面に「賀井」の墨書銘のあるものが検出された。

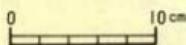
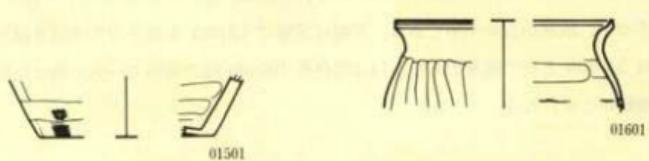
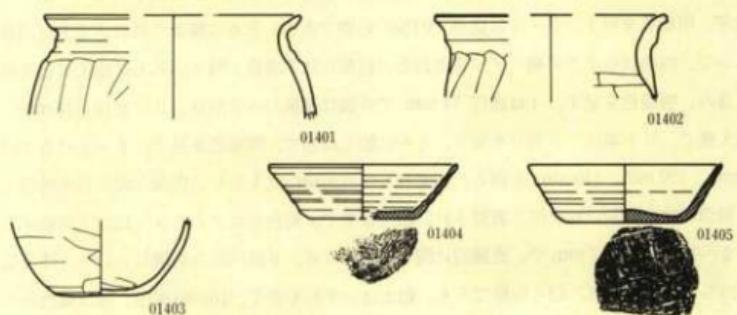
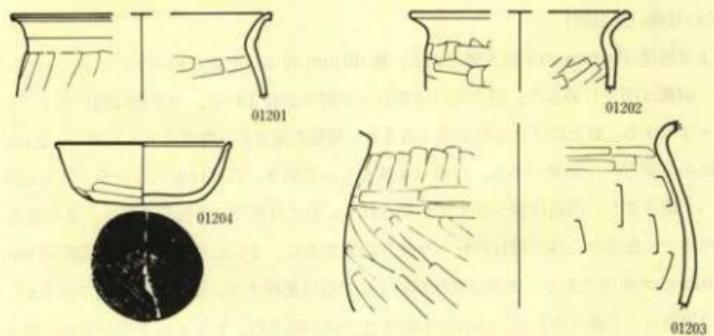
### ・021号跡（第25図）

1は口径 220 mm の大形壺である。比較的ナデ肩で「く」字状に開く口縁は口唇で受口状に立上がる。外面は工具の不明なナデで調整され、胎土に石英粒を多く含み、淡褐色を呈す。2は口径 116 mm の小形壺で、口唇はわずかに受口状を呈す。胴部は荒いヘラ削りが施され、胎土は密で、暗褐色を呈す。3は口径 180 mm の壺であろうか。口縁はわずかに反り返り、内縁に段を残す。外面はヘラ削りされ、胎土は密、外面褐色、内面暗褐色を呈す。

4は口径 104 mm、器高 36 mm、底径 56 mm の塊形の坏である。外全面ヘラ削り調整され、底部の切離し痕も残らない。胎土は密で、赤褐色を呈す。

### ・022号跡（第25図）

1は口径 130 mm、器高 43 mm、底径 62 mm の土師器坏である。体部に丸味があり、深めで、底部は小さい。底部は回転糸切離しのまま無調整である。2は高台付の皿であろうか。高台の内外とも回転ナデ調整され、皿内面の一部に磨き仕上げの痕が残る。1・2とも胎土に砂粒をわずかに含むが密で、褐色を呈す。



第24図 012・014～016号跡遺物実測図

## ・023号跡（第25図）

1は底径196mmの平底大甕である。幅40mm程の粒土帯を積み上げて作られたようであり、胴部は叩きしめられ、胴下端には荒いヘラ削りがなされる。内下端は強い布ようのナデが2～3周する。胎土には石英粒が多く含まれ、褐色を呈すが、焼成はとくに良い。2は口径100mmの球胴形の小形甕である。口縁は丸味をもって開き、口唇は退化した受口状を呈す。胴部はヘラ削りされ、内面は横ヘラナデが施される。胎土は密で、赤褐色を呈す。3は底径80mm程の坏で、底部から体下端は回転ヘラ削り調整である。4は口径164mm、器高53mm、底径90mmの大形坏である。体部は丸味が強く、口唇は肥厚する。切離しは不明であるが、体下端まで手持ちヘラ削りされる。内外とも磨き仕上げが施され、わずかに光沢がある。胎土は緻密で、外面明褐色、内面褐色を呈す。なお底部に「而」の線刻がある。5は区部で13mm程の身幅を持つ刀子片である。棟幅4mmの平造りで、刃は鋭い。なおこの他に丸棒状の鉄製品が床面から検出された。6・7は皇朝銭の一つ「隆平永宝」(796年初鋳)である。鋳は余りなく、2枚重なって出土したが、7の方が、径24.5mmと若干大きい。

## ・024号跡（第26図・第28図）

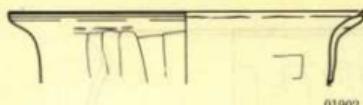
1は口径200mmの甕で、口唇は退化した受口状となる。胴部は比較的丁寧なヘラ削りで胎土は密、明褐色を呈す。2・3は底径90mmの甕である。ともに棒よう具のナデ上げ調整が明らかで、内面は布ようの横ナデが施される。底部には木葉痕が残る。ともに胎土に石英粒を多く含み、明褐色を呈す。4は底径74mmで外面は縱横のヘラ削り、5は底径118mm、の平底大甕で、外下端にヘラ削りを施す。ともに胎土は密で、明褐色を呈す。6～8は各々口径130mm、120mm、110mmを測る。いずれも口唇が受口状を呈し、内縁に段を有する器形である。胴部は比較的荒いヘラ削り調整され、胎土は密で、褐色を呈する。9～12は土師器坏である。9～11は口径117mmで、直線的に開く器形となる。9は回転糸切離しのち、体下端まで手持ちヘラ削りされ、12も同様である。胎土はいずれも密で、10が暗褐色、他は褐色から明褐色を呈す。なお12の底部に「土」の墨書銘がある。他にも坏の破片中に「賀井」「口井」「〇」などの墨書がみられる。13は現存長75mmの刀子である。茎長約50mmで、中程から「く」字に屈曲するが、故意か否か不明である。刃幅は区部で12mmを測り刃先は研ぎ減りが著しい。棟幅は3.5mmとやや細身である。14は現存長100mm程の角棒で一方の端に先細り丸くなる。紡輪軸かと思われる。

## 2項 その他の

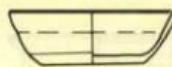
土壤中からの出土品は130、174E、179B号跡にみられるに過ぎない。130は口径125mm、器高45mm、底径54mmで、丸味のある坏である。糸切離しで、ヘラによる調整は全くみら



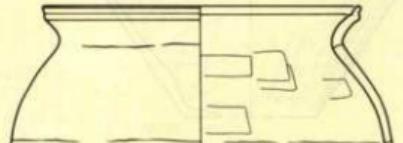
01901



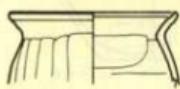
01902



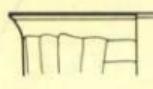
01903



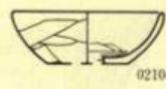
02101



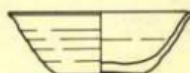
02102



02103



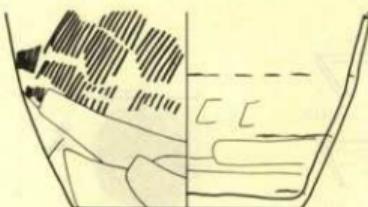
02104



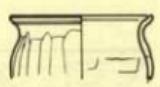
02201



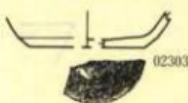
02202



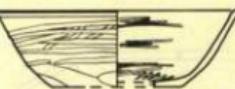
02301



02302



02303

02305  
(1/2)

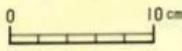
02304



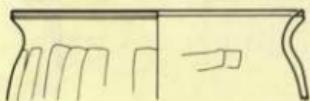
02306



02307 (1/2)



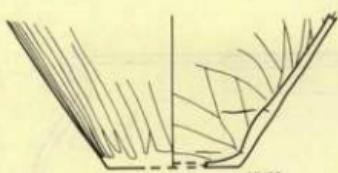
第25図 019・021~023号跡遺物実測図



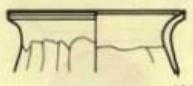
02401



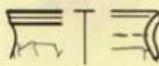
02406



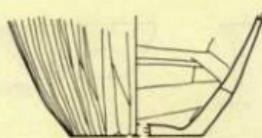
02402



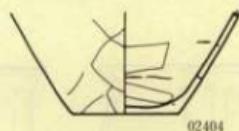
02407



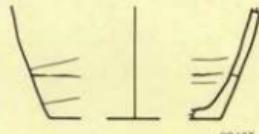
02408



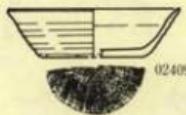
02403



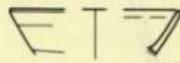
02404



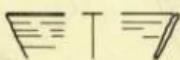
02405



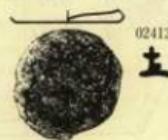
02409



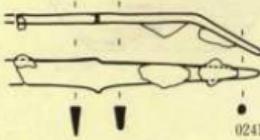
02410



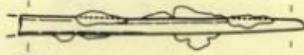
02411



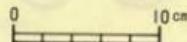
02412



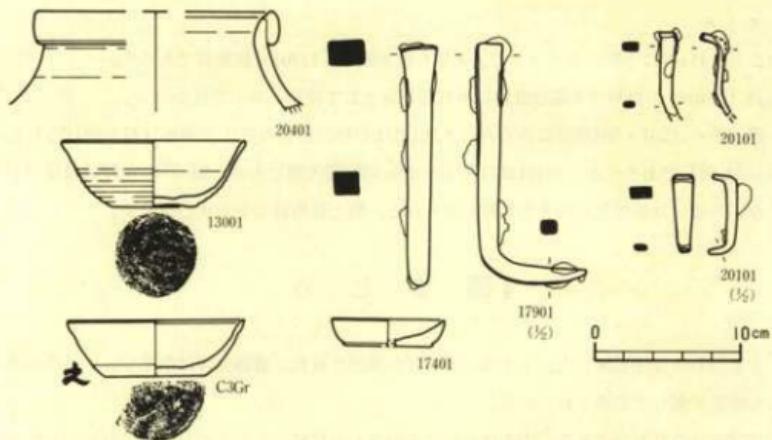
02413 (上)



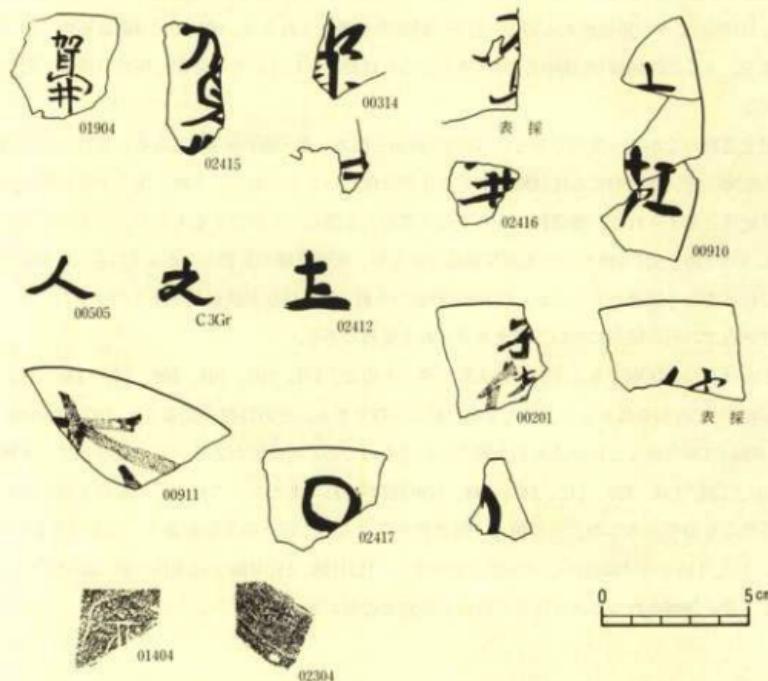
02414 (下)



第26圖 024號跡遺物素描圖



第27図 その他の出土遺物



第28図 墨書・刻書土器

## まとめ

れない。17401は小形のカワラケで、糸切り痕が残る。17901は鉄製釘であろう。

全長 110 mm の角釘で下端は直角に折れ曲り鍔として使用した可能性がある。

溝内からは201・204号跡にみられる。20101は小形の角釘の断片で頭部は打ち曲げられる。

20102も角釘であろうか、20401は口径 160 mm の陶器大甕である。幅 20 mm 程の口縁帯がめぐり、外面には茶褐色の吹き出し釉がみられる。胎土は均質でやや灰色を呈す。

## 4 節 まとめ

本遺跡からは住居跡、大、小土壙、溝などが検出された。遺跡全体は削平や、ゴボウ栽培による攪乱で著しく破壊されていた。

住居跡は合計24軒である。内訳はカマドを有すもの17軒、カマドがなく小形のもの2軒、構造の全く不明のもの6軒となる。カマドを持つ住居跡は殆んどが3.2m前後の方形を呈し、014号跡が4 m級で、むしろ特異な存在である。これらはいずれも国分式土器を伴うが、002号跡～005号跡のような重複があるので、若干の時期差が考えられよう。001、010号跡は極めて小形である。ともに住居跡(生活中心の)と考えることはむずかしく、その時期も中世に降る可能性がある。

出土遺物のなかでも特筆できるのは023号跡から出土した「隆平永宝」である。初鋤は平安初期(796年)で、全国的にも住居跡からの出土例は珍しいようである。本跡の出土土器の様相は9世紀代と考えられる。墨書銘のうちでは「賀井」と読むことができるものが、いくつかある。003、019号跡、024号跡および表面採集品であるが、成田市域の墨書のなかに「口井」がかなりみられることと関連があろうか。なお003号跡から釘、農工具など鉄製品が多く出土した。とくに住居内での釘の使用について考えさせられる資料である。

土壙は3つに類別できよう。一は大形で深いもので、101、102、104、108、109、180、182、195号跡など円形を基本とし、深さ 2 m に及ぶ一群である。その性格を知ることはできないが、101号跡、180号跡などは雨水を溜め置くためのものである可能性がある。二は大形で浅い土壙で103、120、124、127、142、143、148、179号跡がこれにあたる。これらも前記の土壙に準ずる性格のものであろうか。三は焼土・炭化物を含むもので種々の形態がある。このうち107、110、113、115号跡は調査区の中央部に集中する。113号跡、115号跡では本体と柄の部分を持つ点で、最近注目されつつある中世以降の火葬跡と近似する。

## The Horinouchi site

Preface

Prefatory notes

Contents

Chapter I Location and Excavation Process

1. Location

2. Excavation Process

Chapter II Artifacts

1. Pit-dwellings

2. Pits

Chapter III Remains

1. Pit-dwellings

2. Other artifacts

Chapter IV Conclusion

## SUMMARY

Horinouchi site is located in lots 293 and other, Horinouchi, Narita-shi in the north of Chiba prefecture. It is situated on a Shimousa Plateau which is the upper Tokko stream. It was excavated from April 2 to August 31 in 1981.

It was possible to excavate about many dwelling pits, large or small pits and other.

Pit-dwellings :

The dwelling pits were twenty-five altogether in the excavated area of Horinouchi : seventeen dwellings severally had a clay oven, two dwellings were small and had not clay oven, and six dwellings were unknown. Those were used during Kokubu pottery phase (9 century time).

A Ryuhei eihō coin (minted no earlier than 769 A.D.) had been placed in the dwelling pit (No. 023).

Pits :

The pits were one hundred altogether in the excavated area. Those are classified into three groups ; first group are large and deep, and their plan are circle. Second group are large and shallow. Last group are various forms, and some pits has interesting materials.

# 写 真 図 版



1. 遺跡空撮（西より）

2. 調査風景

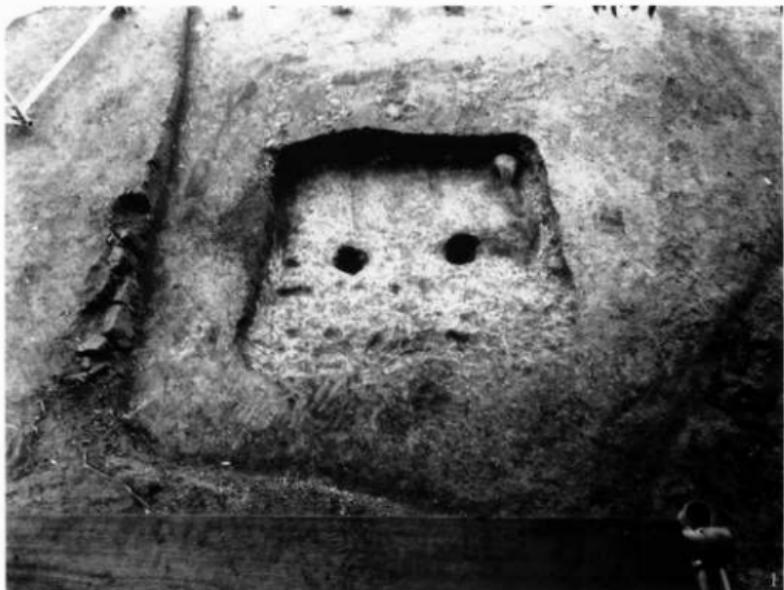


1. 遗踪空撮

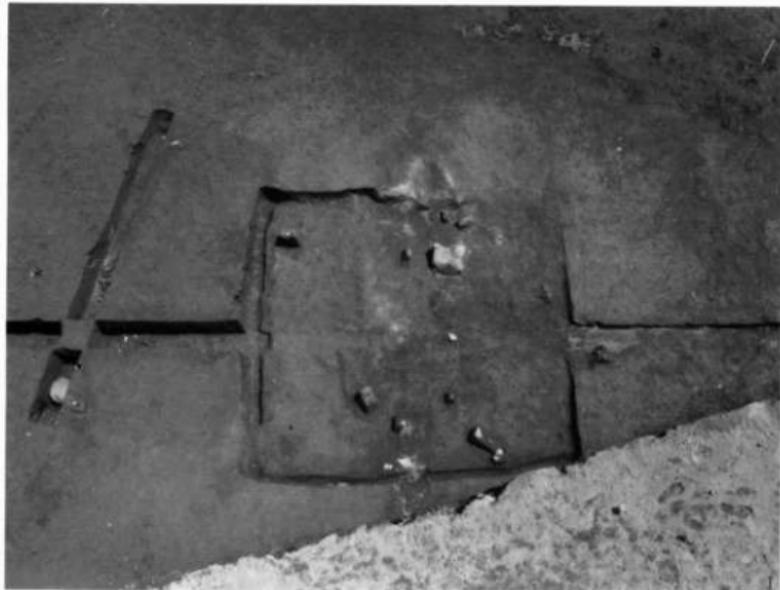


1. 遺構検出状況（東側）

2. 同（西側）



1. 001 号跡全景      2. 002~005 号跡検出状況

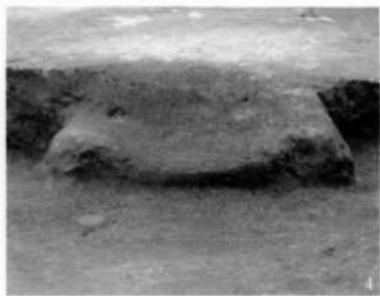
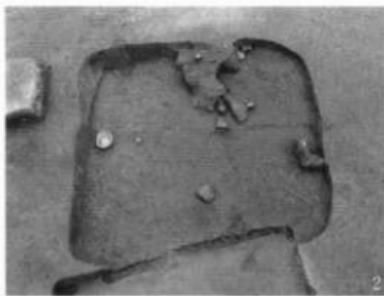
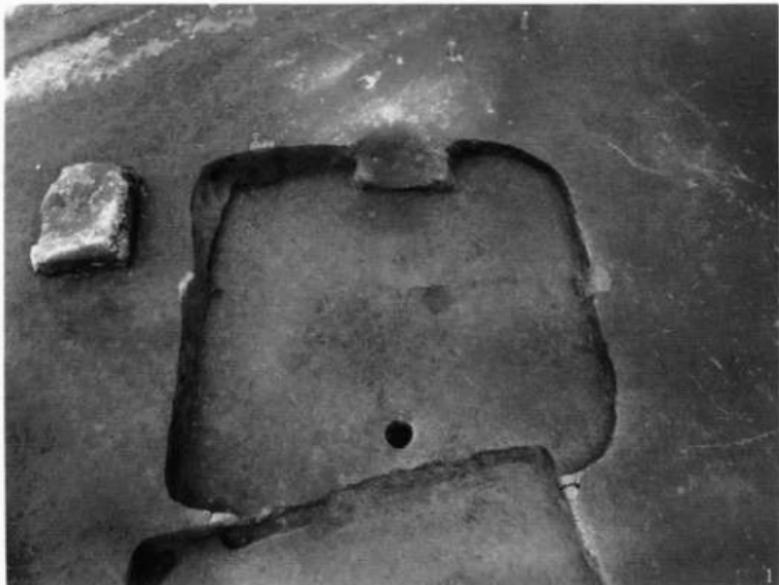


1. 003号跡全景

2. 遺物出土状況

3. カマド断面

4. カマド断面



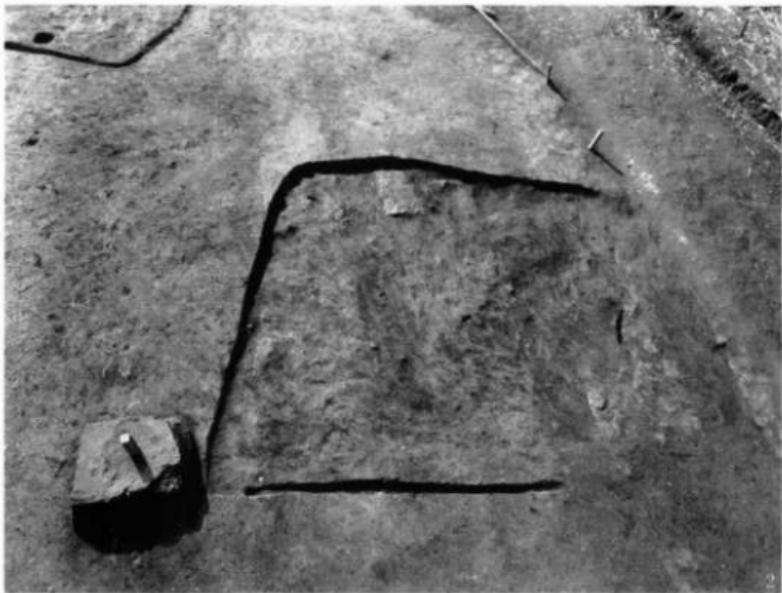
1. 004号跡全景 2. 遺物出土状況 3. 遺物出土状況 4. カマド 5. 同 断面



1. 005号跡全景 2. 009号跡全景

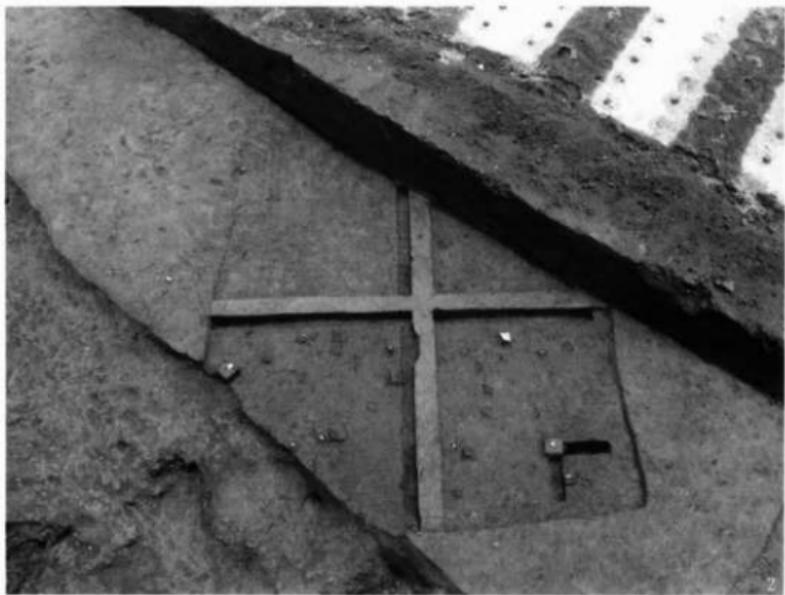


1



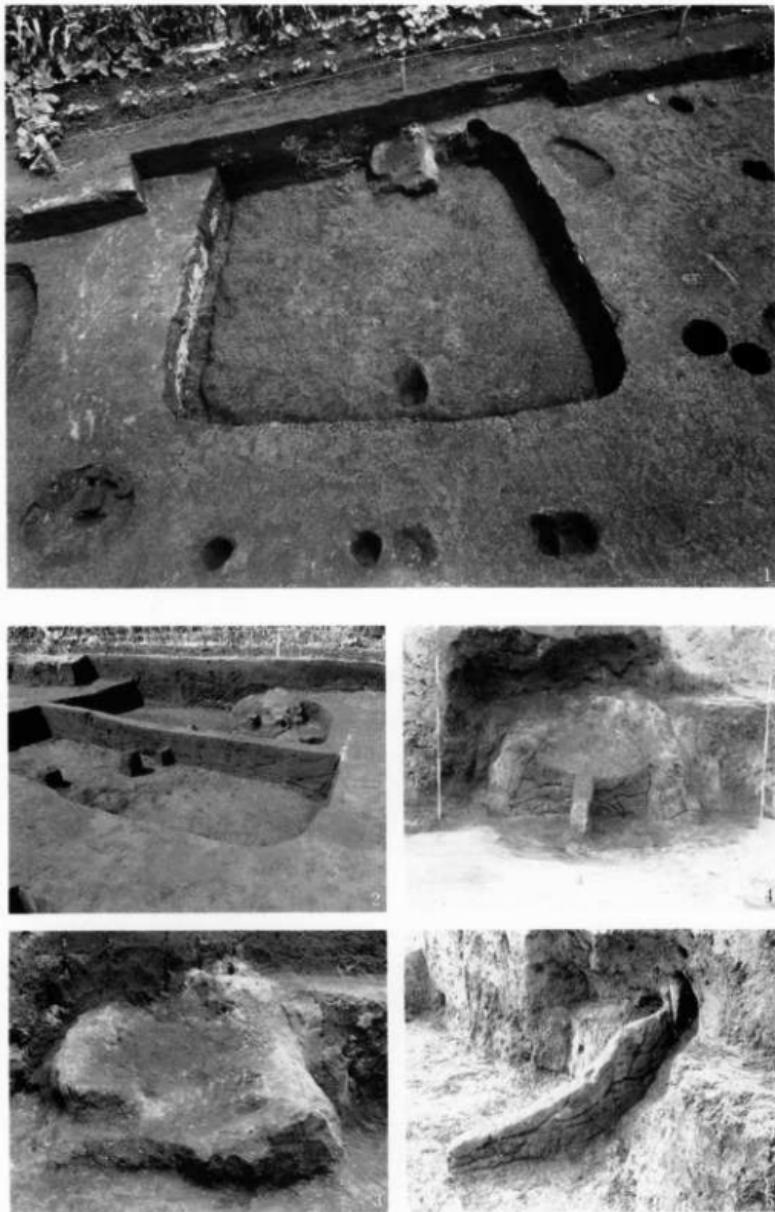
2

1. 010 号跡全景 2. 011 号跡全景

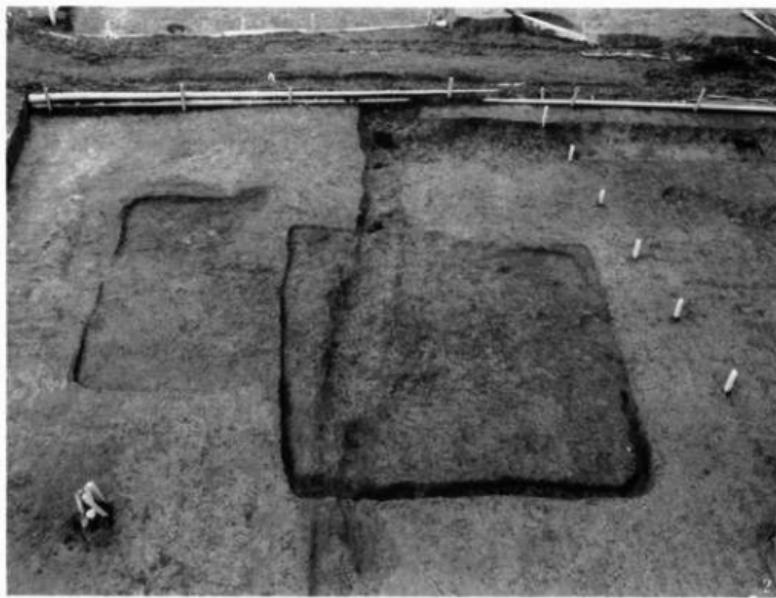
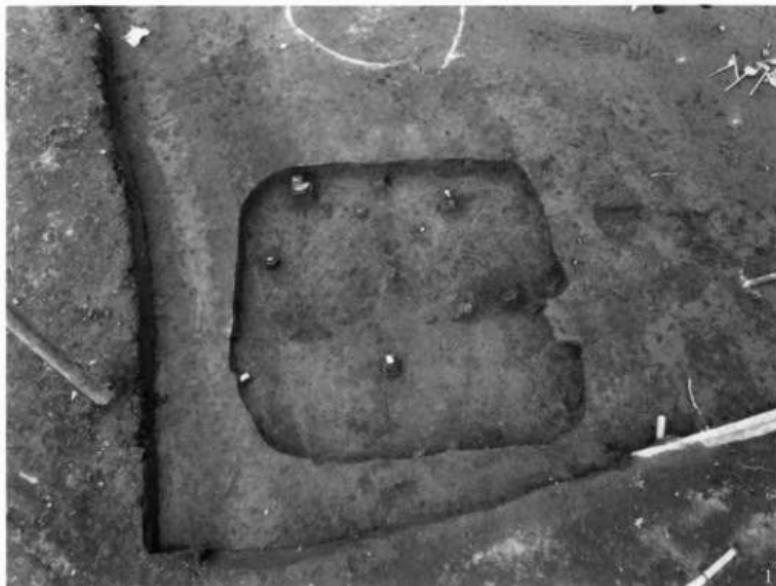


1. 012号跡全景 2. 013号跡遺物出土状況

図版 10



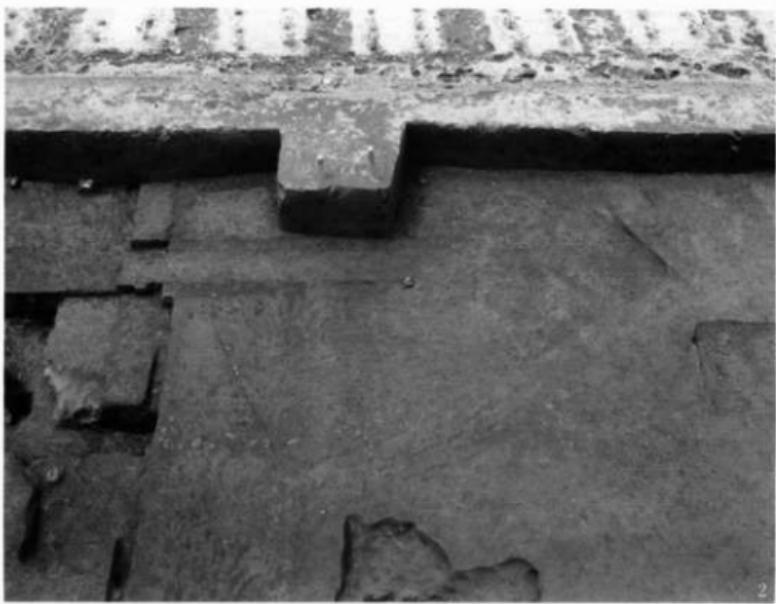
1. 014号跡全景 2. 覆土断面 3. カマド 4. 同 断面 5. 同 断面



1. 015号跡全景 2. 016・017号跡全景



1

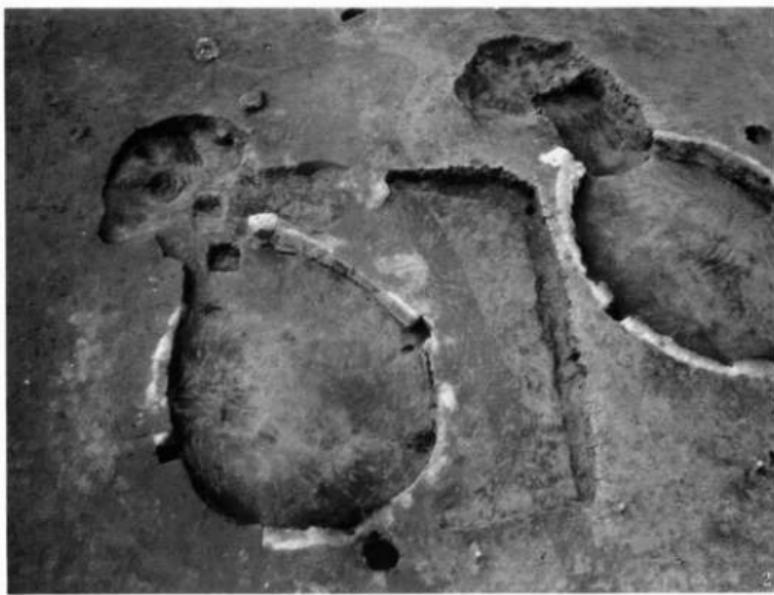


2

1. 019号跡全景 2. 020号跡全景



1



2

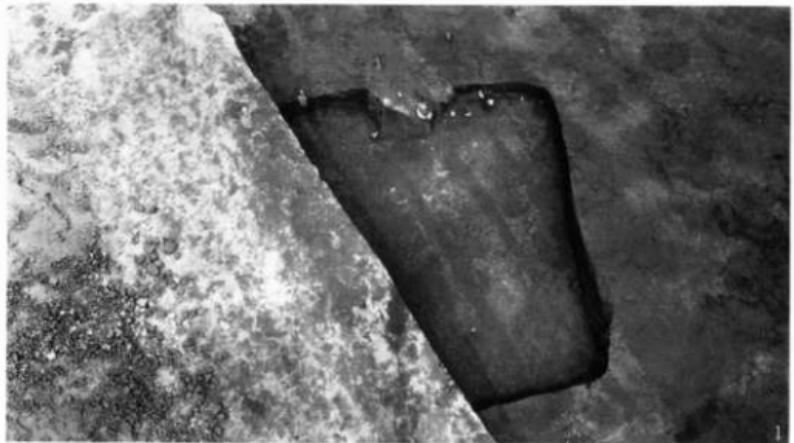
1. 021 号迹全景 2. 022 号迹全景



1. 023 号踪全景

2. 遗物出土状况

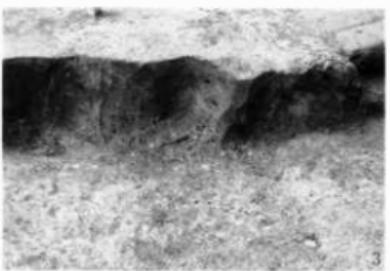
3. 遗物出土状况



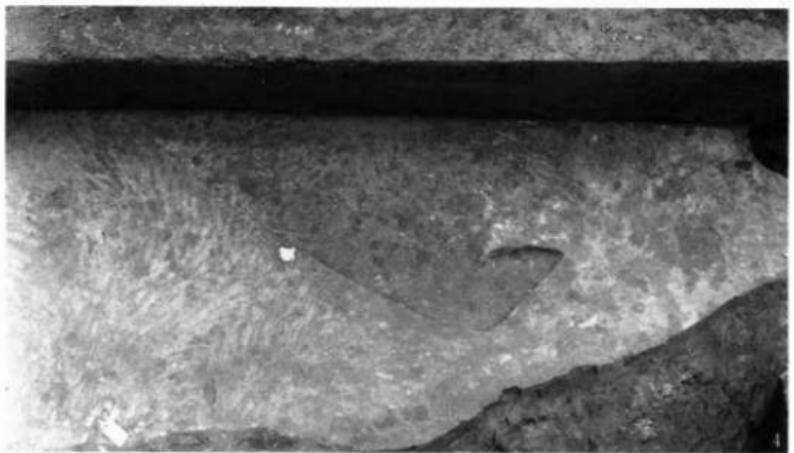
1



2



3



4

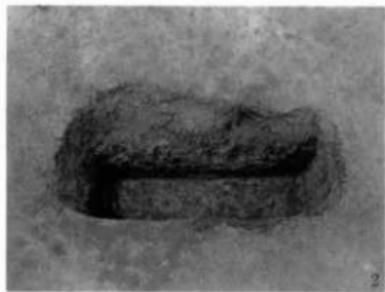
1. 024号跡全景 2. カマド 3. 同 挖方 4. 025号跡全景



1. 101号迹全景  
2. 102号迹全景  
3. 同断面  
4. 103·104号迹全景  
5. 108号迹全景  
6. 109·110号迹全景  
7. 115号迹周边



1



2



3



4

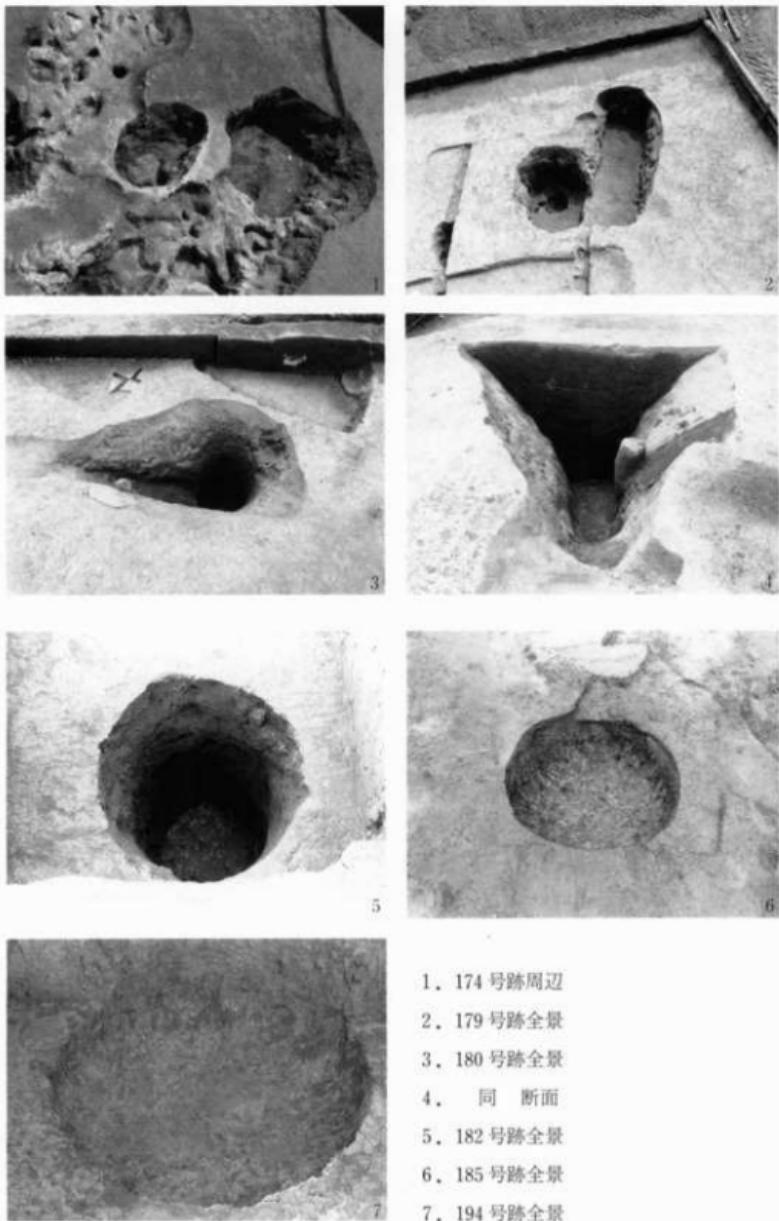
1. 143号跡周辺

2. 143号跡全景

3. 同 断面

4. 147~149号跡全景

図版 18



1. 174号跡周辺
2. 179号跡全景
3. 180号跡全景
4. 同 断面
5. 182号跡全景
6. 185号跡全景
7. 194号跡全景



1. 201 号跡全景 2. 202 号跡全景

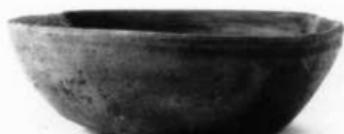
图版 20



00303



00502



00404



00503



00405



00504



00403



00505



00506



00508



00507



00701



01204



00702



01405



00904



01903



00905



02101



00906



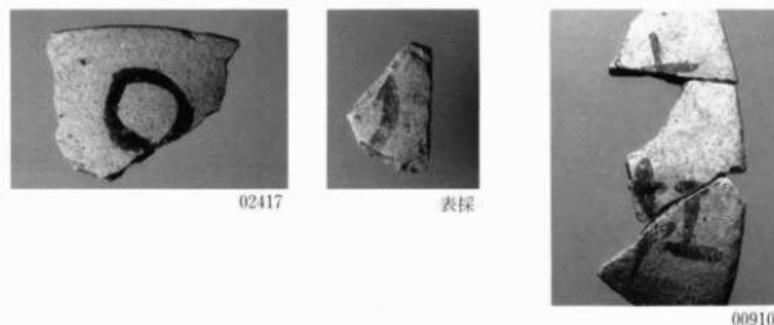
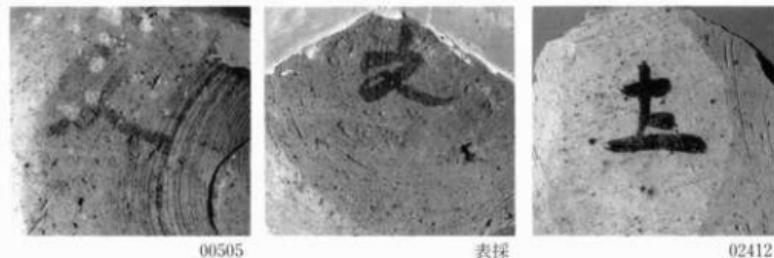
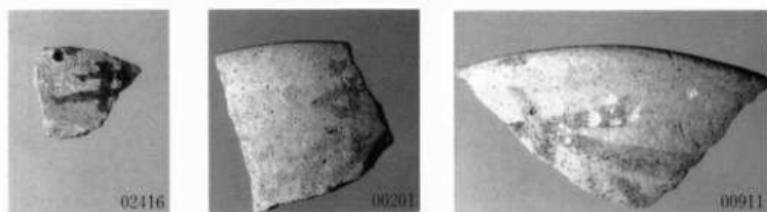
00902



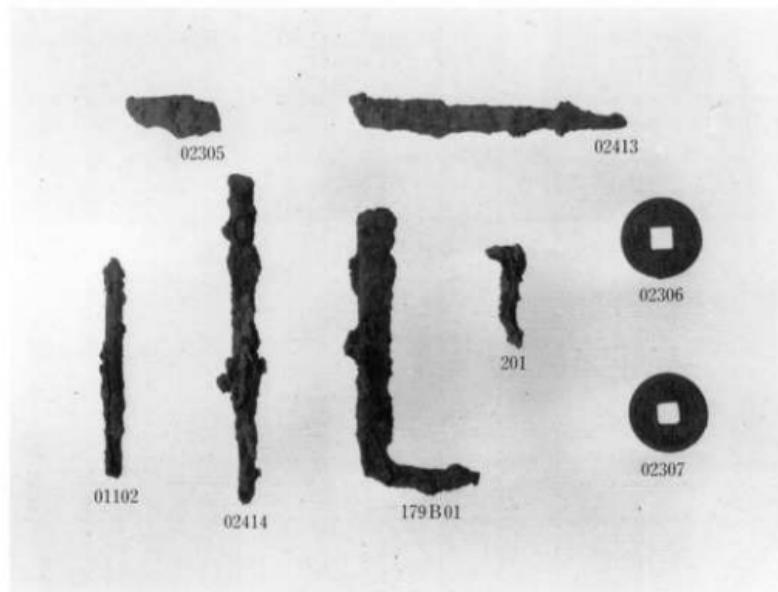
02102



022~024・130・174 号跡他出土土器



遺跡出土墨書土器



昭和58年2月21日 印刷  
昭和58年3月31日 発行

成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書III

発行 日 本 鉄 道 建 設 公 団  
財團法人 千葉県文化財センター  
千葉県千葉市亥鼻1-3-13  
電話 0472(25)6478

印刷 株式会社 弘 文 社  
千葉県市川市市川南2-7-2